富山市埋蔵文化財調査報告 115

富山市水橋荒町（みずはしあらまち）・辻ヶ堂（つじがどう）遺跡

発掘調査報告書

－常願寺川右岸本線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

2002

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告 115

富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡

みずはしあらまち　つじがどう

発掘調査報告書

－常願寺川右岸本線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

２００２

富山市教育委員会

例　言

1．本書は、富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡地内に所在する水橋荒町・辻ヶ堂遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、富山市建設部道路課の依頼を受けて、富山市教育委員会が設置した富山市埋蔵文化財調査委員会（委員長 前田英雄）が受託して実施した。調査主体は富山市教育委員会である。

3．調査期間・面積は以下のとおりである。

発掘調査	平成12年11月 1日～平成13年 3月23日	840㎡
出土品整理	平成12年11月 1日～平成14年 3月29日	

4．発掘調査は富山市教育委員会 埋蔵文化財センター学芸員 鹿島昌也、同嘱託 安達志津が行った。

5．現地発掘調査及び出土品整理に際し、下記の諸氏、諸機関に指導助言をいただいた。記して謝意を表します。（敬称略、順不同）

文化庁　富山県教育委員会文化財課　富山県埋蔵文化財センター　岸本雅敏（富山県埋蔵文化財センター）　池野正男（同）　宮田進一（同）　保科齊彦（新湊市博物館）　野積正吉（同）　小松外二（水橋郷土史料館）　田嶋明人（石川県教育委員会事務局文化財課）

6．自然科学分析は次のとおり委託し実施した。

(1)　A区河道跡の土質ボーリング調査（ハンドオーガボーリング）……ダイチ株式会社

(2)　珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・種実同定　……パリノ・サーヴェイ株式会社

(3)　放射性炭素年代測定　……パリノ・サーヴェイ株式会社・株式会社大成エンジニアリング

7．本書の本文・挿図の表示は次のとおりである。

(1)　方位は真北、水平基準は海抜高である。座標は国家座標を使用し、南北をX軸、東西をY軸とした。

(2)　調査区の長軸は北から約20°東に振っているが、便宜上、長軸方向海側を北として、土層断面図、写真図版見出し等に記載した。

(3)　遺構番号は、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、掘立柱建物：ＳＢ、井戸：ＳＥ、穴：Ｐ、不明土坑：ＳＸを基本とする。

(4)　調査に着手する前に耕作土を調査区より広めに除去しているため、土層断面図に耕作土は記載されていない。

(5)　遺物写真のスケールは特にことわりがない場合は約３分の１である。

8．出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。

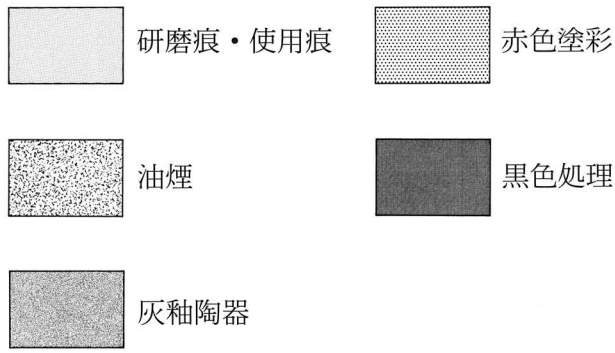
10．平成１１年度試掘調査で出土した遺物は、該当する本調査各区の包含層出土遺物として掲載した。

11．本書の執筆は、Ⅱ　調査に至る経緯を主任学芸員 古川知明、Ⅳ　自然科学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社大成エンジニアリングが行い、その他は安達が行った。遺物写真の撮影は鹿島が行った。

目次

Ⅰ　遺跡の位置と環境　……1
Ⅱ　調査に至る経緯　……5
Ⅲ　調査の概要
　1. 調査の方法　……6
　2. 基本層序　……6
　3. 遺構　……7
　4. 遺物　…23
Ⅳ　自然科学分析
　1．古環境調査　…34
　2．年代測定　…43
Ⅴ　まとめ　…45
写真図版　…53
報告書抄録　…63

凡例



図版目次

第１図　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡と周辺の遺跡
第２図　常願寺川旧流路復元
第３図　平成１２年度及び過去の調査区位置図
第４図　各調査区位置図
第５図　各区基本層序摸式図
第６図　ＳＤ０３・ＳＤ１１(Ａ区)遺物出土図・土層断面図
第７図　ＳＤ２６(Ａ区)遺構平面図・土層断面図
第８図　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡Ａ区遺構平面図及び土層断面図
第９図　ＳＢ０１(Ａ区)遺構平面図・エレベーション図
第１０図　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡Ｂ区遺構平面図及び土層断面図
第１１図　ＳＤ８５(Ｂ区)遺物出土図・土層断面図
第１２図　ＳＢ０２(Ｂ区)平面図・Ｐ８２土層断面図
第１３図　Ｐ７２(Ｂ区)遺物出土図・土層断面図
第１４図　ＳＥ０１(Ｂ区)遺物出土図・土層断面図
第１５図　ＳＫ２２(Ｃ区)遺構平面図・土層断面図
第１６図　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡Ｃ区遺構平面図及び土層断面図
第１７図　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡Ｄ区遺構平面図及び土層断面図
第１８図　Ａ区出土遺物実測図
第１９図　Ａ区出土遺物実測図
第２０図　Ａ区出土遺物実測図
第２１図　Ｂ区出土遺物実測図
第２２図　Ｂ区・Ｃ区出土遺物実測図
第２３図　Ｃ区・Ｄ区出土遺物実測図
第２４図　製塩土器実測図
第２５図　西水橋町字名図
第２６図　地山面エレベーション図及び遺物出土頻度積み上げ面グラフ
第２７図　推定官衙域とその周辺

写真図版目次

写真図版 1　水橋荒町•辻ヶ堂遺跡遠景
写真図版 2　各調査区全景
写真図版 3　A区
写真図版 4　A区
写真図版 5　B区
写真図版 6　C区
写真図版 7　A区出土遺物
写真図版 8　A区出土遺物
写真図版 9　B区出土遺物
写真図版 10　C・D区出土遺物

表目次

表1　周辺の遺跡一覧
表2　溝属性一覧

第1図　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡と周辺の遺跡（1：25,000）

Ⅰ　遺跡の位置と環境

水橋荒町・辻ヶ堂遺跡は、富山市街の北東部、常願寺川の右岸に位置する。標高２～３ｍに立地しており、古くから常願寺川の氾濫の影響を受けてきたところである。

平成３～５年と平成８・９年に行われた、浄化センター建設に伴う発掘調査では縄文（中・後・晩）・弥生（後）・古墳（後）・白鳳・奈良・平安・鎌倉・室町・江戸時代にわたる大規模な集落跡であることが確認された。中でも奈良・平安時代の遺構が中心であり、5間×3間の大型の掘立柱建物や倉庫、井戸、道路、区画溝などが見つかっている。同じ時期の遺物としては多量の須恵器・土師器のほかに墨書土器（「竈神」など数点）、石製帯飾り（丸鞆1点）がある。このような遺構・遺物のあり方から官衙的な性格が考えられ、『延喜式』に記載された越中八駅の一つ「水橋駅」と推定されている。

表１　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代
1	水橋荒町・辻ヶ堂	集落跡・官衙跡	縄文(中～晩)・弥生・古墳(前・後)・白鳳・奈良・平安・中世・近世
2	浜黒崎	散布地	奈良・平安・中世
3	浜黒崎町畑	散布地	奈良・平安
4	浜黒崎飯田	散布地	奈良・平安・中世・近世
5	高来	散布地	奈良・平安
6	野田Ⅱ	散布地	縄文(後・晩)・弥生・古墳(前)
7	横越	散布地	奈良・平安・中世・近世
8	浜黒崎悪地	集落跡	縄文(晩)・弥生(中)・古墳(前)・平安・中世・近世
9	浜黒崎野田・平榎	集落跡	縄文(前・中・後・晩)・弥生・古墳(前)・奈良・平安・中世・近世
１０	野中新長幅	集落跡	縄文(後)・弥生・古墳(前)・奈良・平安・中世・近世
１１	平榎亀田	散布地	古墳(前)・奈良・平安
１２	高島島浦	集落跡	縄文(晩)・弥生・古墳(前)・奈良・平安・中世・近世
１３	針原中町Ⅰ	集落跡	縄文(後)・弥生(中)・古墳・奈良・平安・中世・近世
１４	宮条南	集落跡	縄文(後～晩)・弥生(中)・古墳(前)・平安・中世・近世
１５	水橋畠等	散布地	弥生・古墳・近世
１６	水橋東出町	散布地	奈良・平安
１７	水橋朝日町	散布地	弥生・奈良・平安・中世
１８	水橋永割	散布地	平安・近世
１９	水橋伊勢屋Ａ	散布地	奈良・平安・中世
２０	水橋伊勢屋Ｂ	散布地	中世
２１	水橋中村	散布地	奈良・平安
２２	水橋池田館	散布地	古墳・奈良・平安・中世
２３	水橋石政	散布地	縄文(晩)・奈良・平安・中世
２４	水橋大正	散布地	平安・中世・近世
２５	小出城跡	城館集落跡	縄文(後～晩)・古墳(前)・奈良・平安・中世

今回の調査地はこの水橋駅推定地及び隣接する地区であり、駅とその周辺の様相をうかがい知る手がかりが得られるものと予想された。

周辺の遺跡に目を向けてみると、常願寺川の左岸に多くの遺跡が存在する。縄文時代の後・晩期から奈良・平安時代、中世・近世の遺跡が多くある。中でも浜黒崎野田・平榎遺跡は縄文時代の後期中頃から晩期にかけての木の実の処理場や弥生時代後期から古墳時代の初めにかけての集落跡が検出されている。高島島浦遺跡では弥生時代の後期を主体とし、奈良時代から中世にいたる集落が、針原Ⅰ遺跡では弥生時代中期と中世の集落がそれぞれ発掘調査で検出されている。

常願寺川の右岸をみると、奈良・平安時代から中世・近世を主体とした遺跡が現在の白岩川両岸に見られる。

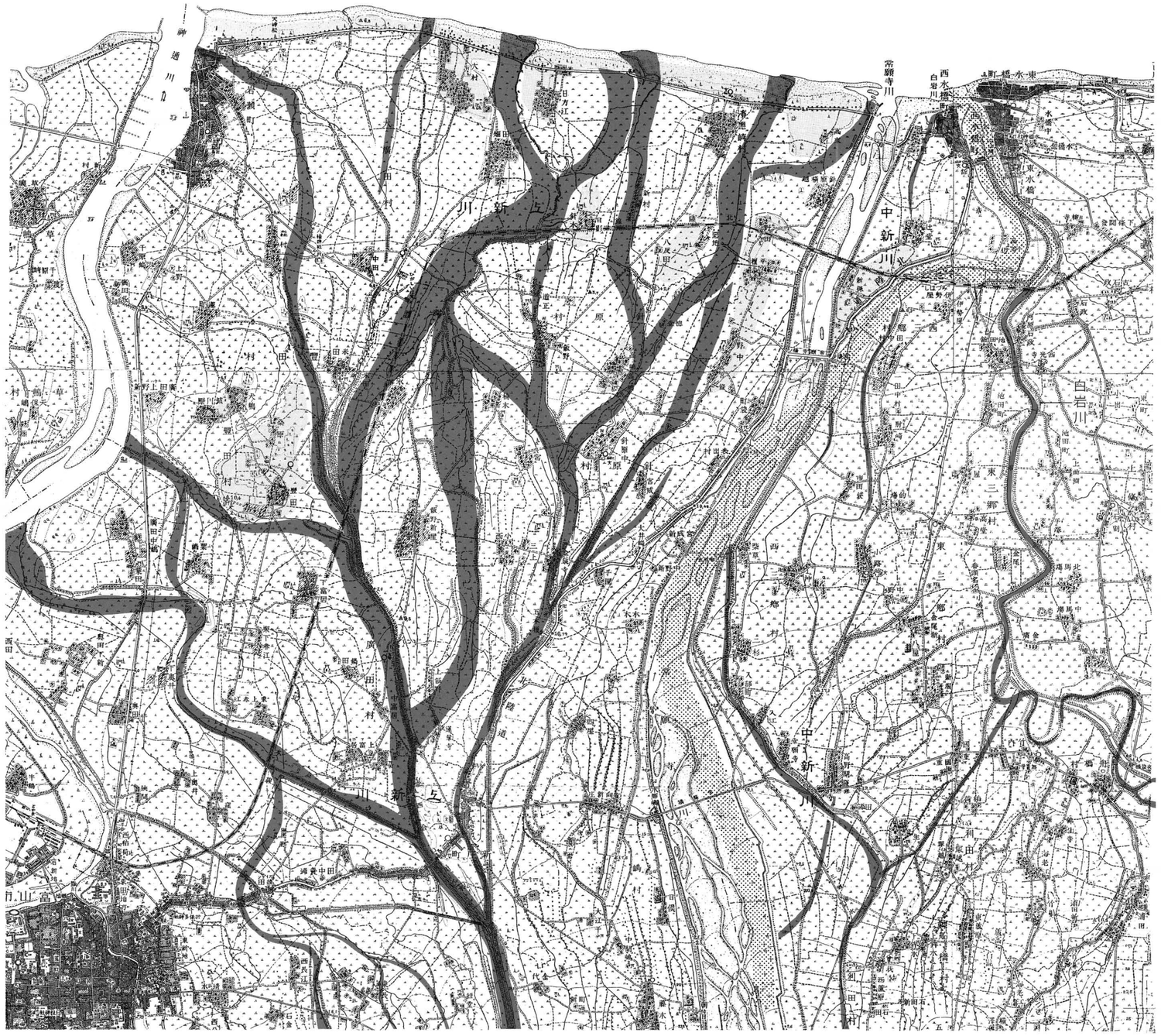
常願寺川は日本屈指の暴れ川として知られ、度々氾濫によって川筋を変えてきた。最近では明治24年の大洪水が有名である。この水害がきっかけで、白岩川と合流し水橋川と呼ばれていた常願寺川の下流は、オランダ人技師デ・レーケによって分水工事が行われ、明治26年、現在の常願寺川となった。

明治期の地図や1910年撮影の航空写真、１ｍごとの等高線などを見ると、常願寺川の、特に左岸に幾筋もの川筋や自然堤防の名残が確認できる。このような旧地割や微地形と、近世・近代の絵図をもとに常願寺川の本・支流の流路復元を試みたのが第２図である。

江戸前期の越中国四郡絵図（小矢部市教育委員会蔵）や加越能三州国絵図（延宝５年、1677年　金沢市立玉川図書館蔵）でも常願寺川は白岩川に合流している。また、『枕草子』や中世の紀行文などに水橋のわたりが記されている。「水橋」の地名が移動していないとすれば、古代後半期には常願寺川の本流はデ・レーケによる改修以前の流路とほぼ同じだったと考えられる。よって水橋荒町・辻ヶ堂遺跡は古代以降、明治期までは常願寺川左岸に位置していたこととなる。それより前の常願寺川は流路が定まらず、神通川と白岩川の間を移動していたと言われている。

また、第２図を見ると現在ではコンクリート擁壁に囲まれた用水と化している荒川が、常願寺川の一大支流として常願寺川扇状地の網の目のような小河川の源となっていることがわかる。ひとたび常願寺川が氾濫すれば、これらの小河川も大きな影響を受けたであろう。先人たちはわずかな微高地に住まいをし、氾濫原を開拓し、耕地へと変えていったのである。

水橋荒町・辻ヶ堂遺跡自体も古代以降、現在の水田耕作面まで２層から４層の土砂の堆積があり、常願寺川の氾濫の影響を激しく受けているようである。

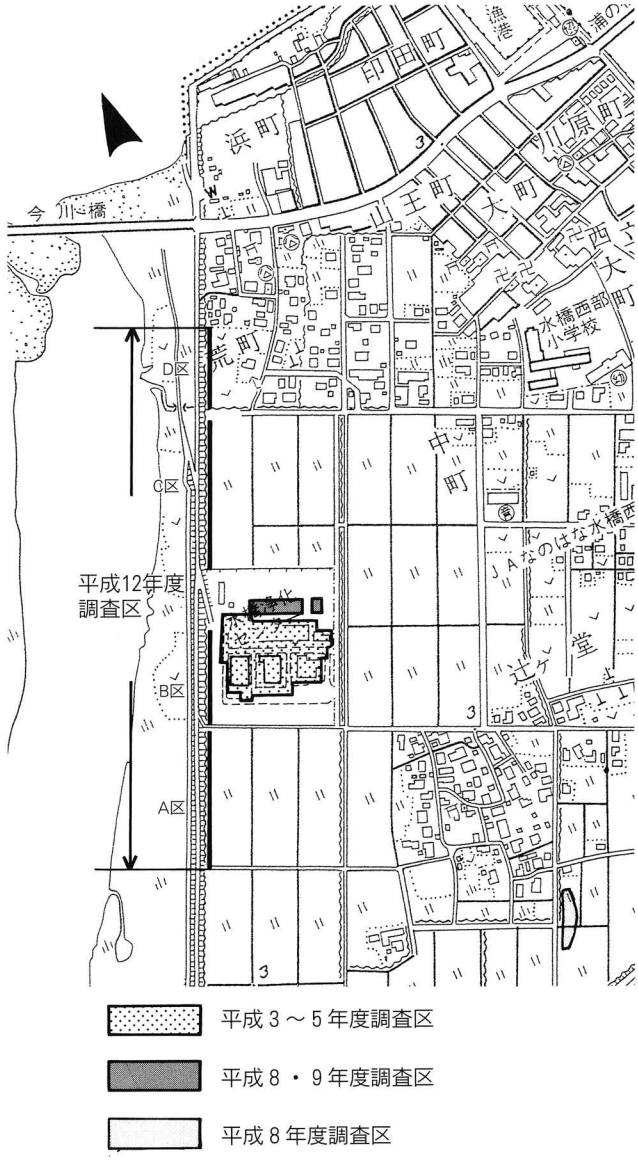


第２図　常願寺川旧流路復元 S＝1/40,000（明治43年陸地測量部測量迅速図 ２万分の１を利用）

Ⅱ　調査に至る経緯

水橋荒町・辻ヶ堂遺跡は、富山市教育委員会が実施した市内遺跡分布調査（昭和63年度～平成３年度）により新たに発見された遺跡である。昭和63年12月に富山市遺跡地図に「水橋荒町遺跡」として登載し、以後周知の埋蔵文化財包蔵地とした。遺跡推定範囲として約55haという広大な範囲が設定され、縄文時代から中世にわたる複合遺跡と考えられた。遺跡は平成11年に「水橋荒町・辻ヶ堂遺跡」と改称した。

本遺跡における調査は、水橋浄化センター建設に伴う平成３年度の試掘確認調査がある。常願寺川堤防に接する約30,000㎡の敷地全体から、古墳時代後期から中世にわたる土坑・溝が多数確認され、古墳時代後期の土器埋置土坑が特に注目された。出土遺物に石帯（丸鞆）１点と平瓦が１点あり、この段階で古代の官衙的施設と推定されていた。



第３図　平成12年度及び過去の調査区位置図（1：10,000）

本格的な発掘調査の実施は、浄化センター第１期工事にかかる12,300㎡（平成３年度4,800㎡、平成４年度 5,600㎡、平成５年度1,900㎡）、第２期工事にかかる1,954㎡（平成８年度954㎡、平成９年度1,000㎡）がある。調査では掘立柱建物50棟、井戸24基、区画溝、道路跡など多数の奈良～平安時代の遺構を検出し、これらは延喜式に記載された越中八駅の一つ「水橋駅」に比定されるに至っている。

その後、平成11年８月、富山市道路課から常願寺川右岸堤防の拡幅について協議があった。拡幅部分は河川保全区域内にあったため過去において試掘確認調査は実施しておらず、平成11年10月に試掘確認調査を実施した。その結果、堤防東側における遺跡の南北端を把握（約700m）するとともに、奈良時代を主とする柱穴・溝等の遺構や遺物が多数検出され、これらは浄化センターに所在した遺構群と密接に関連するものと考えられた。このため、用水掘削にかかる延長600m、拡幅幅1.4mを対象として平成12年秋～冬に発掘調査を実施することとなったものである。

（古川）

Ⅲ　調査の概要

1．調査の方法

まず、重機で調査区及び排土置場の耕作土を除去し（幅4m）、その土で水が流入しないよう畦畔を作った。その後、幅1.4mの調査区内の掘削を行った。包含層内に遺物を多く含む所では包含層を残し、少ない所では黄色粘質シルト直上まで重機により掘削を行った。包含層を残した所では人力によって黄色粘質土まで掘り下げた。遺構によっては黄色粘質シルトより上の層から掘り込むものがあるが、遺構検出が困難なため黄色粘質土まで下げ検出を行った。遺構の図化は写真測量により行った。出土遺物実測や遺構図の補足はトータルステーションによって測量した。

2．基本層序

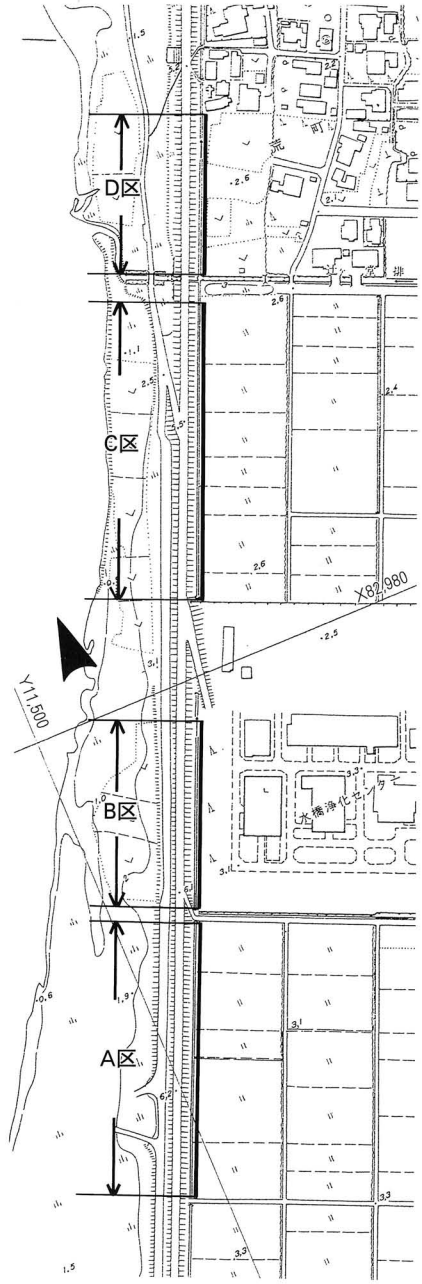
A区では第1層淡灰色土、第2層橙灰白色砂質土、第3層黒褐色土を基本とする。第4層に灰褐色土（地山漸移層）または暗褐色土がある箇所がある。遺構は第3層から掘り込むもの、第4層又は地山面から掘り込むものがある。高いところでは第1層目が削平されている。

（パターン1・2）

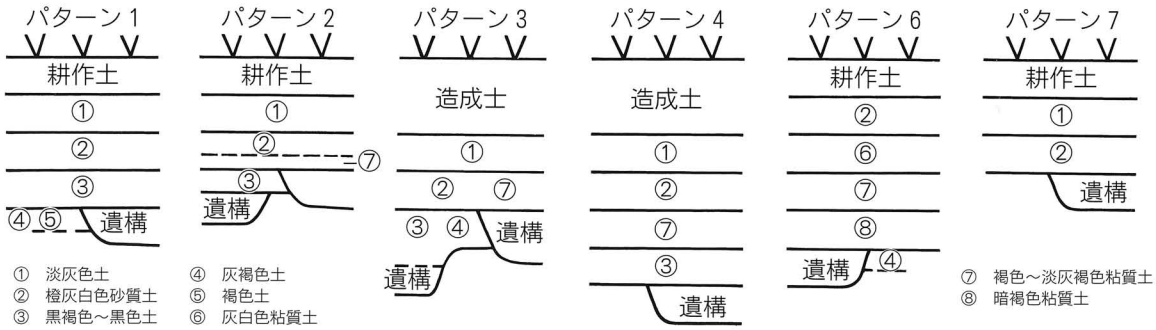
B区では造成土の下は基本的にA区と同じである。一部、淡灰褐色土が第2層としてあるいは第2層と3層の間に入る箇所がある。（パターン2・3・4）

C区では第1層橙灰白色砂質土、第2層灰白色粘質土、第3層褐色土から淡灰褐色土、第4層暗褐色土を基本とする。（パターン6・7）

D区は第1層淡灰色土、第2層橙灰白色砂質土を基本とする。場所によっては地山直上まで造成土が入る。（パターン7）



第4図　各調査区位置図（1：5,000）



第5図　基本層序模式図

3.遺構

A区

河道跡、溝、土坑、柱穴状ピットを検出した。

河道跡（第8図、写真図版3）　調査区を東西に横切る幅約72m、最深部の深さ約2.8m（標高マイナス0.95m）の河道跡である。幅1.4mの調査区内でこの河道跡を完掘することは、壁の崩落を伴い危険であるため、河道内8ヶ所、河道両岸の上がり口2ヶ所でハンドオーガボーリング調査を行い、河道の断面形、深さの確認を行った。第8図下はこの結果と掘削による土層断面のデータをもとに柱状図を作成したものである。上がり口部分のボーリング調査から得た基本層序データから、粗砂又は灰色系砂質シルトの上部を河道基底部と判断した。断面形は南岸から徐々に深くなった後、一旦平坦になり、南岸から約30m付近で再び深くなり、№7ポイント（北岸より21.6m）付近で最も深くなる。北岸部分には幅3.4m深さ0.2mから0.25mの段がありその南側から急激に深くなる。段には深さ0.15mから0.05mの浅い溝が5本調査区に直交して検出された。

ボーリング調査で得た土壌サンプルの内、有機物を含むサンプル8点について放射性炭素年代測定を行った（Ⅳ自然科学分析2．年代測定参照）。サンプルが河道内堆積物であるため、有機物の年代がそのまま層の堆積した年代を示すかどうかという問題はあるが、遺物の出土状況からみても、河道基底付近の砂質シルトの年代は約3,000年前（縄文時代後期）、中層の植物遺体を多く含む黒色土の層で1,900年前（弥生時代後期）、河道形成前の堆積物の層で4,000年前（縄文時代中期後半）と考えていいだろう。

河道基底部付近は砂質シルト（植物遺体はほとんど含まない）が0.2～0.4mの厚さでほぼ平均的に堆積しており、河道が形成されてから約1,000年間はかなりの量の水が速い速度で流れていたと考えられる。

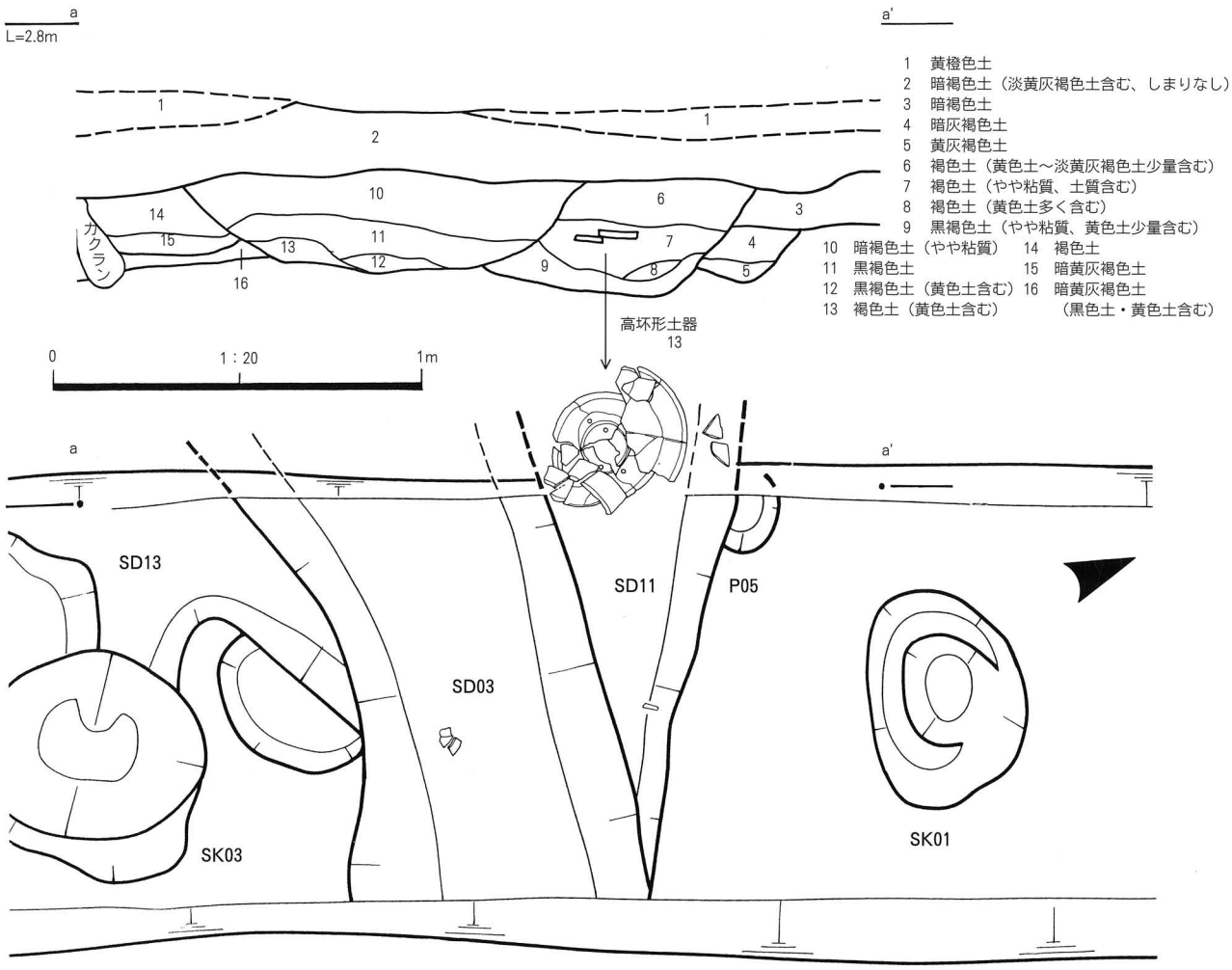
放射性炭素年代測定によって1,900年前との結果が出た黒色土層及びその上層の黒灰色から暗灰褐色系の植物遺体を多く含む層は最深部より南側では厚く、厚さ0.8～1.2mに及ぶが、最深部より北側の№8・№9では薄い。このことから弥生時代後半以降はすでに水の流れは滞り、特に南側では沼地化していたと考えられる。

奈良•平安時代の深さはデータでは出なかったが、層位的にみて淡黄灰色粘質土層がこの時代に属すると思われる。両岸付近に見られる灰褐色粘質土の層（サンプル5）は放射性炭素年代測定では2,200年前との結果が出ているが、下の層と年代が逆転しており、この層も奈良•平安時代に属する可能性は否定できない。

河道内出土の遺物は、縄文土器（後・晩期）、打製石斧、弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、珠洲焼、土師質土器、被熱礫、礫、箸状木製品、木製品、炭などがある。

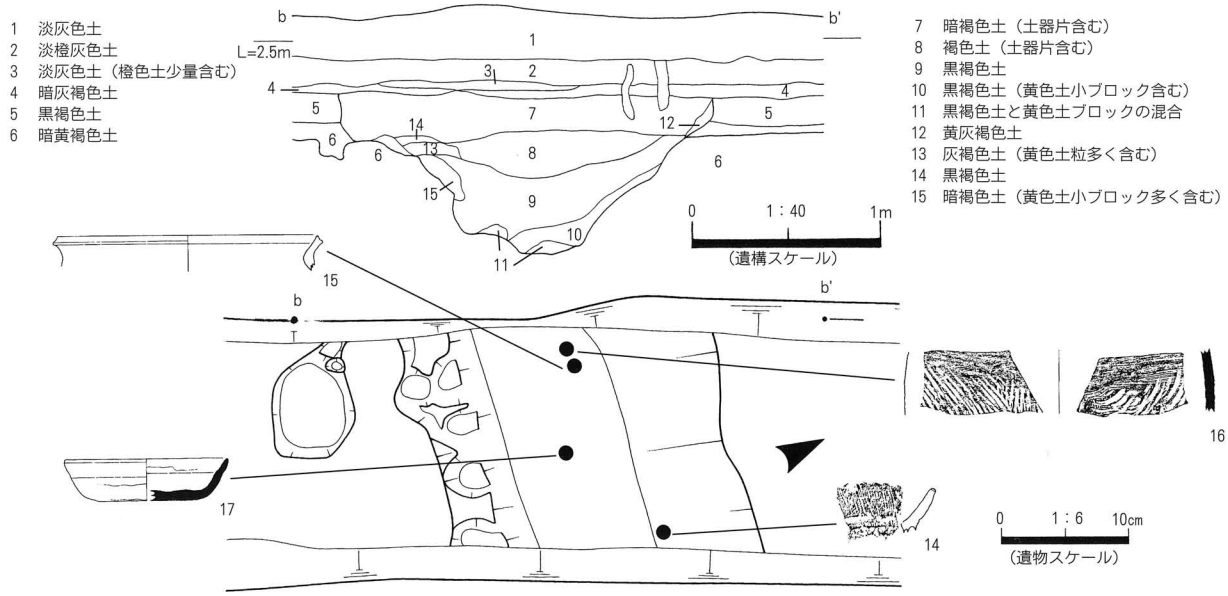
溝　28条を検出している。

ＳＤ０１、ＳＤ０２、ＳＤ０３、ＳＤ１１（第6・8図、写真図版4）　いずれも弥生時代の溝である。ＳＤ０１がＳＤ０２を切り、ＳＤ０３がＳＤ１１を切る。検出面からの深さはいずれも0.1～0.15mと浅く、覆土は暗褐色から黒色土を呈する。ＳＤ１１の調査区



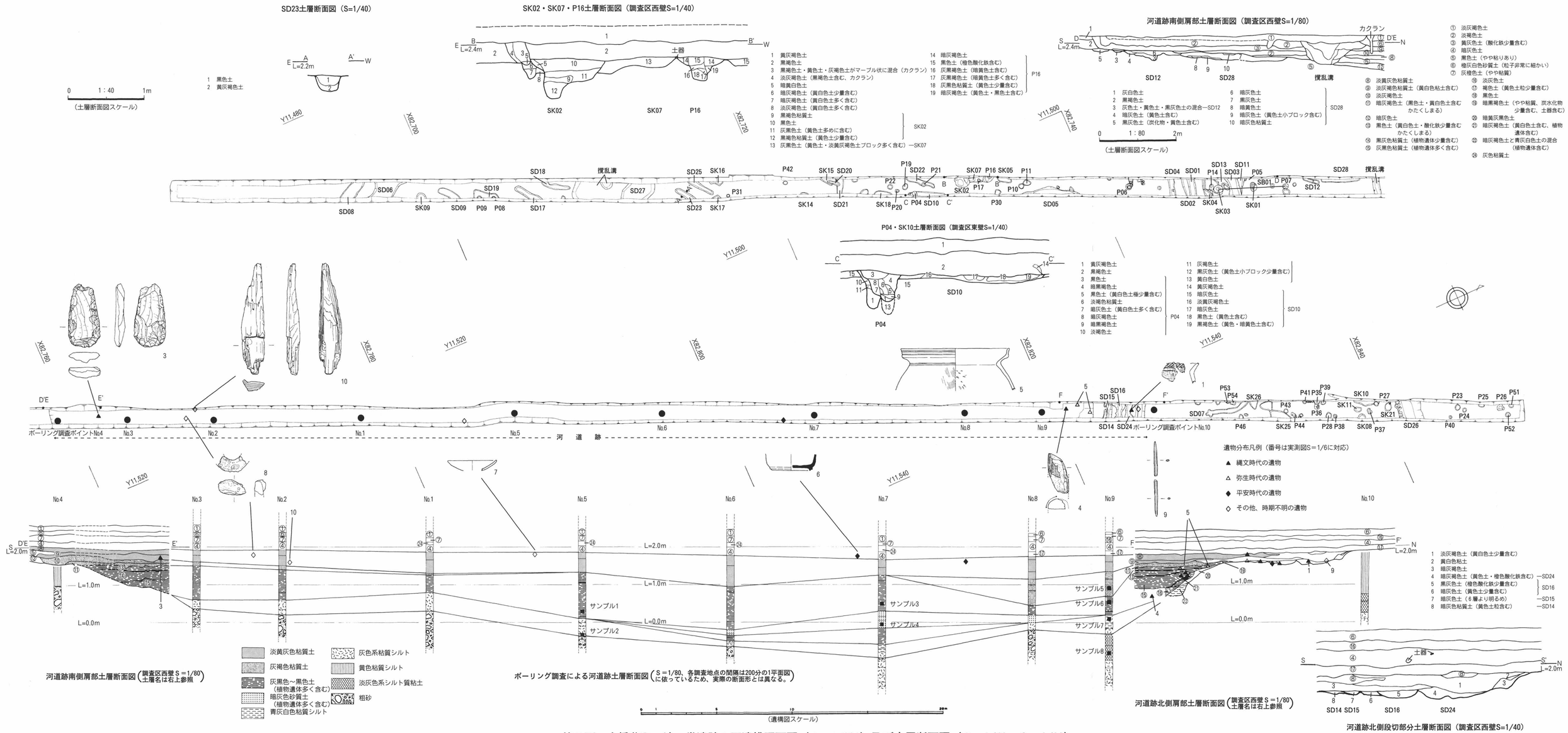
第６図　SD03・SD11（A区）遺物出土図・土層断面図S＝1/20

（図中遺物番号は第18図に対応）

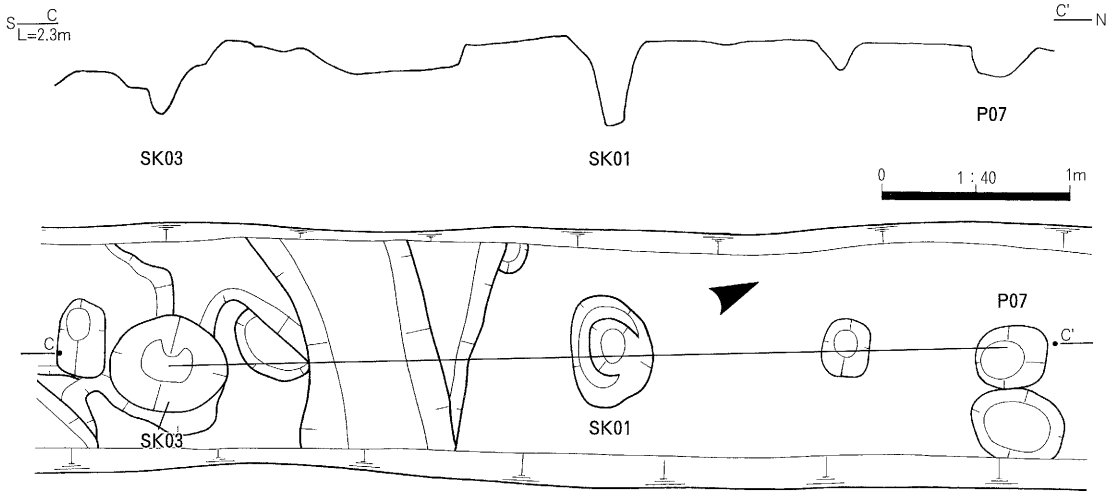


第７図　SD26（A区）遺構平面図・土層断面図S＝1/40

（遺物は図化可能なもののみ出土位置を示した。番号は第18図に対応S＝1/6）



第８図　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡Ａ区遺構平面図（Ｓ＝1/200）及び土層断面図（Ｓ＝1/40、Ｓ＝1/80）



第９図　ＳＢ０１（Ａ区）掘立柱建物跡平面図・エレベーション図（Ｓ＝1/40）

外延長部分からは弥生時代後期の高坏が出土している。ＳＤ０３からは溶結凝灰岩製の削器が２点出土している。

ＳＤ０９・ＳＤ１７・ＳＤ１８・ＳＤ２３・ＳＤ２５（第８図）　平行に走る短めの溝で、幅0.25～0.5m、深さ0.05～0.2mを測る。畠の畝跡と考えられる。ＳＤ２３の覆土の植物珪酸体分析を行ったところ、タケ亜属が比較的多く、イネ属が少量検出された。イネ属の検出については、分析を行ったパリノ・サーヴェイ株式会社からは肥料や保温用敷藁などの農業資材としての使用に由来するとの知見を得ている。遺物はほとんど出土せずＳＤ２３から縄文土器らしき小片が出土しているのみである。

ＳＤ０７（第８図、写真図版４）　北西方向から南南西方向へ彎曲する幅0.3m、深さ0.05～0.1mの溝である。縄文土器、弥生土器が出土している。

ＳＤ２６（第７・８図、写真図版４）　幅1.5～1.7m、検出面からの深さ約0.65mでほぼ東西方向に走る。どちら側に流れていたかは不明である。覆土上層は暗褐色土、中層は褐色土、下層は黒褐色土である。底面付近は地山土の黄色土ブロックを多く含む。上層・下層から多くの土器が出土している。南岸斜面の上部には５基以上の小ピットが存在する。出土遺物には縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、チャート剥片、礫、植物種子がある。

掘立柱建物　１棟を検出している。

ＳＢ０１（第９図、写真図版４）　ＳＫ０３、ＳＫ０１、Ｐ０７を柱穴とする弥生時代の建物である。ただし、Ｐ０７が浅いためＳＫ０３、ＳＫ０１を梁行1間として東西に桁方向を伸ばす建物である可能性がある。ＳＫ０１は0.4×0.6m、深さ0.5mで出土遺物は弥生土器の壺がある。ＳＫ０３は0.5×0.6m、深さ0.4mで出土遺物は縄文土器、弥生土器の高坏がある。柱間寸法は2.4m、2.1m、方向はＮ－22°－Ｅである。

土坑　16基を検出している。

ＳＫ０２（第８図）　長径0.95m、短径推定で0.8m、深さ約0.6mの土坑である。南西側で小ピットを切り、北側でＳＫ０７を切っている。北側にはテラス状の段がある。弥生土器が出土している。

柱穴状ピット

Ｐ０４（第８図）　新旧二つのピットが切り合っており、北側のピットが新しい。直径は検出面で0.5m、柱痕直径はともに0.18mである。縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器椀の他に製塩土器が10片出土している。

Ｂ区

溝、掘立柱建物、井戸、土坑、性格不明遺構、柱穴状ピットを検出した。

溝　南‐北から南南西‐北北東方向の溝が２９条、北西‐南東方向の溝１条を検出した。

ＳＤ８５（第１１図、写真図版５）　幅0.9～1.0m、深さ0.4mを測る。覆土は黒色シルトである。弥生土器、須恵器、土師器、砥石が出土している。

ＳＤ７４・ＳＤ７５・ＳＤ７６・ＳＤ７７（第１０図、写真図版５）　ＳＤ７４は幅0.7～0.8m、深さ0.2m、ＳＤ７５は幅0.3～0.35m、深さ0.1m、ＳＤ７６は幅0.3～0.45m、深さ0.25m、ＳＤ７７は幅0.8～0.95m、深さ0.6mを測る。覆土は黒褐色から黒色土である。ＳＤ７４、ＳＤ７６、ＳＤ７７は黒褐色土から掘りこんでいる。ＳＤ７４からは弥生土器、ＳＤ７７からは須恵器が出土している。

ＳＤ９３・ＳＤ９４・ＳＤ９５（第１０図）　ＳＤ９３、ＳＤ９５がほぼ直角にＳＤ９４と交わる。深さは最大で0.18mである。浄化センター部分の調査でも格子状の細い溝が検出されており、畠跡ではないかと思われる。弥生土器、土師器が出土している。

ＳＤ９７（第１０図）　検出長9.9mを測る。東側の肩は調査区外にある。弥生土器、須恵器、土師器、鉄製品が出土している。

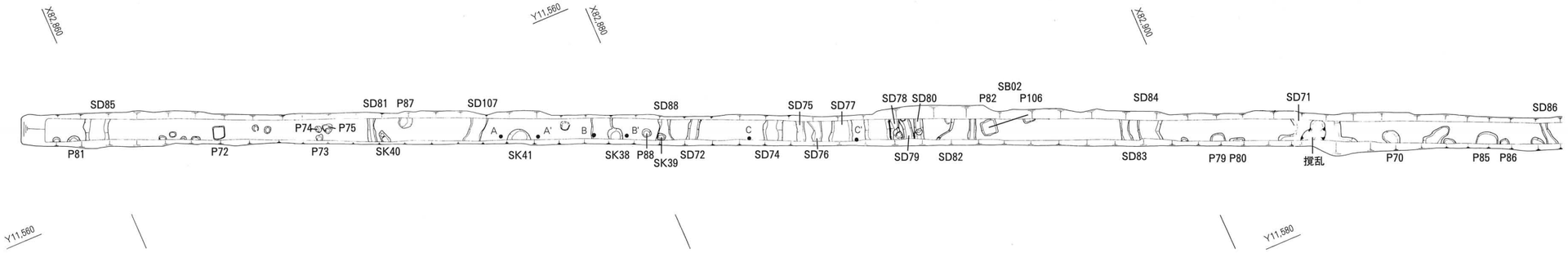
掘立柱建物　１棟を検出している。

ＳＢ０２（第１２図、写真図版５）　方形の掘り方を持つＰ８６・Ｐ１０６を柱穴にもつ掘立柱建物である。Ｐ８６の掘り方の1辺が約0.6m、深さ0.24m、Ｐ１０６は1辺約0.5m深さ0.1mを測る。方向はＮ－8°－Ｅとほぼ正方位をとる。

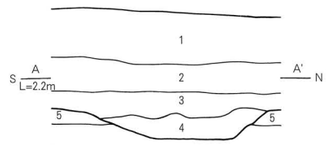
Ｐ７２（第１３図、写真図版５）　つながる他の柱穴は調査区内にはないが、同じく方形の掘り方をもつことから掘立柱建物の柱穴と考えられる。弥生土器、土師器、被熱礫など破片数にして34点の遺物が出土している。

井戸　素掘りの井戸１基を検出している。

ＳＥ０１（第１４図、写真図版５）　円形プランを呈すると思われる。直径は南北で0.9m、深さは0.7mを測る。調査中に調査区及び井戸の壁面が崩落したため、下半部の断面形や土層の状況は不明である。

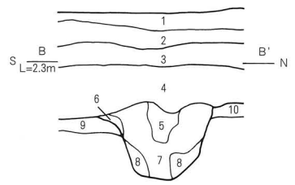


SK41土層断面図（調査区東壁 S＝1/40）



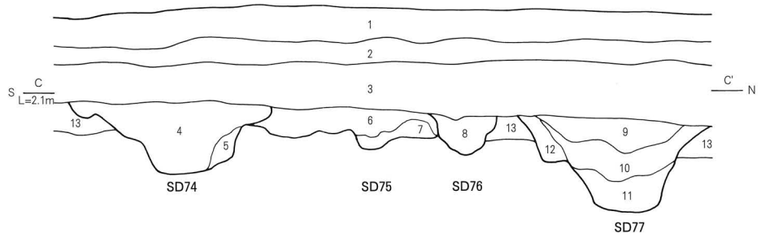
1　橙灰白色砂質土
2　暗灰褐色土
3　黒灰色土
4　黒灰色土
　（黄色土・遺物含む）
5　暗灰色土（黄灰色土含む）

SK38土層断面図（調査区東壁 S＝1/40）



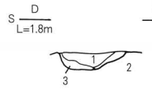
1　灰色土（造成土）
2　淡灰色土
3　橙灰白色砂質土
4　黒色土（土器片少量含む）
5　黒灰色土（黄色土）
6　明灰色土
7　黒灰色土（暗灰色土含む）
8　黒色土（黄色地山小ブロック含む）
9　暗灰色土（黄色地山土含む）
10　灰褐色土

SD74・SD75・SD76・SD77土層断面図（調査区東壁 S＝1/40）



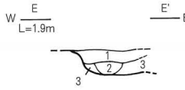
1　淡灰色土
2　橙灰白色砂質土
3　黒灰色土
4　黒色土
5　黒褐色土　— SD74
6　黒色土（黄褐色鉄分小ブロック含む）
7　黒黄色土　— SD75
8　黒色土　— SD76
9　黒褐色土（しまる）
10　黒色土（9層よりやわらかい）
11　黒色シルト
12　黒色土（黄色土含む）　— SD77
13　暗黒褐色土

SD95土層断面図（S＝1/40）



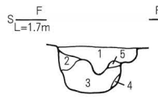
1　黒色土
2　黒黄色土
3　黒灰色土

SD94・SD93土層断面図（S＝1/40）



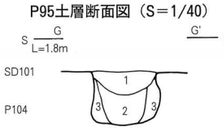
1　黒灰色土　— SD94
2　黒色土（黄色土多く含む）
3　黒褐色土粘質土　— SD93

SD101・P104土層断面図（S＝1/40）

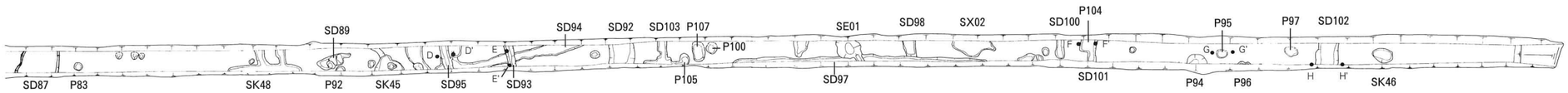


1　黒色土　— SD101
2　黒色土（黄色土多く含む）
3　黒色土（黄色土2層より少ない）
4　黄色土ブロック
5　黒色土　— P104

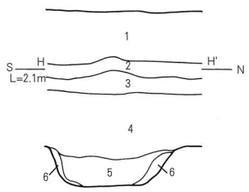
P95土層断面図（S＝1/40）



1　黒色粘質シルト（1cm大の黄色土小ブロック含む）
2　黒色粘質土
3　黒黄色土



SD102土層断面図（調査区東壁 S＝1/40）

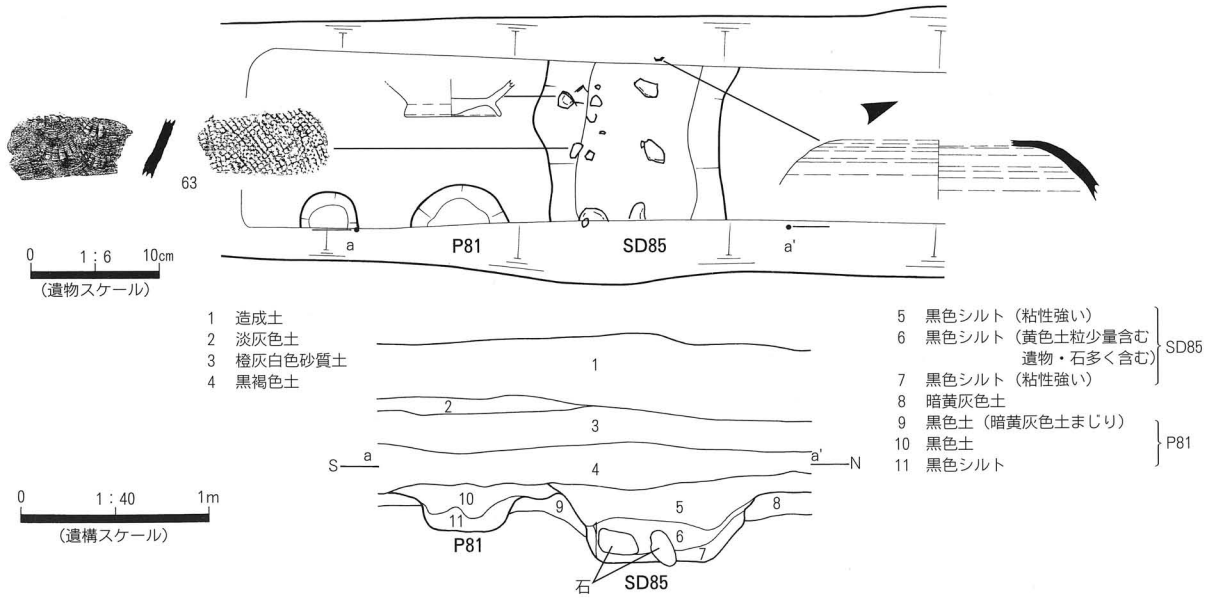


1　淡灰色土
2　橙灰白色砂質土
3　暗灰色シルト
4　黒色土
5　黒色シルト
6　黄色土（黒色土少量含む）

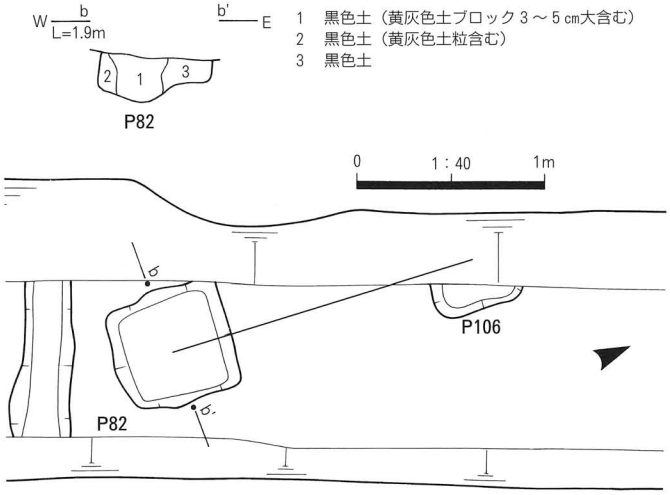
0　1：40　1m
（土層断面図スケール）

1：200
0　1　5　10　20m
（遺構図スケール）

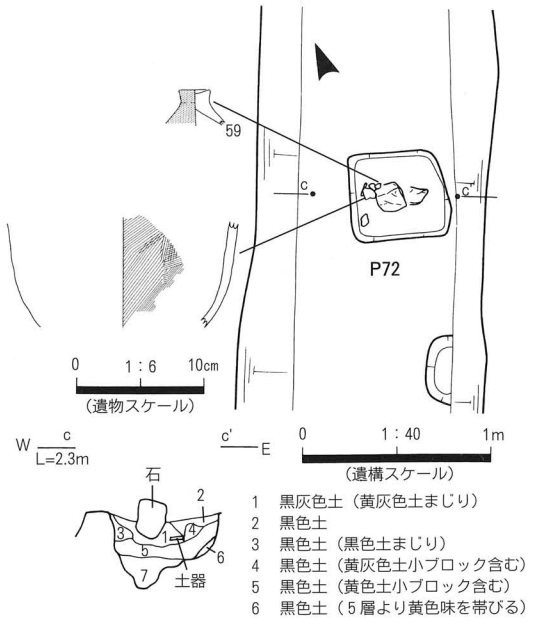
第10図　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡Ｂ区遺構平面図（Ｓ＝1/200）及び土層断面図（Ｓ＝1/40）



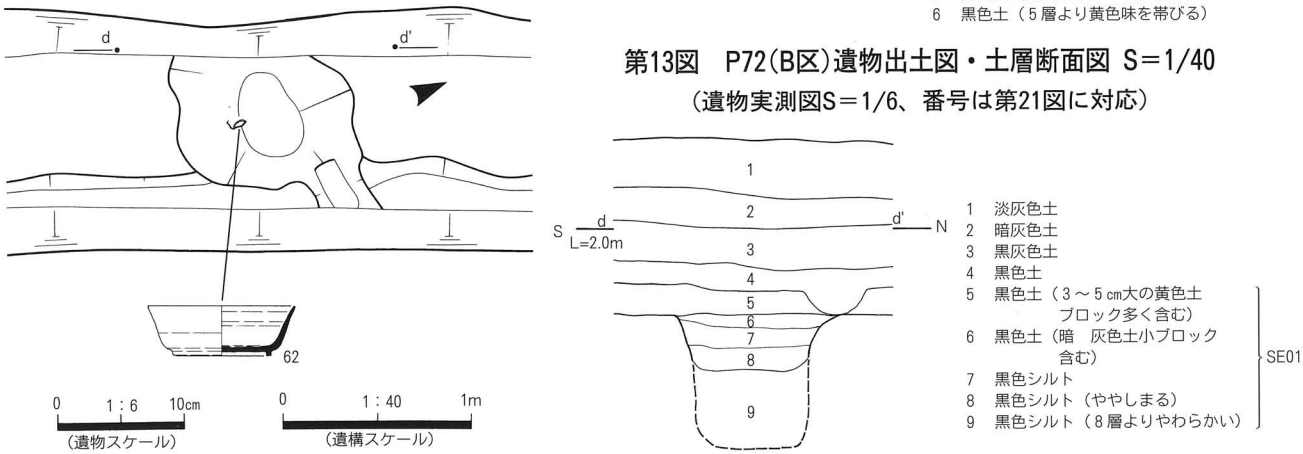
第11図　SD85(B区)遺物出土図・土層断面図S＝1/40(遺物実測図S＝1/6、遺物番号は第21図に対応)



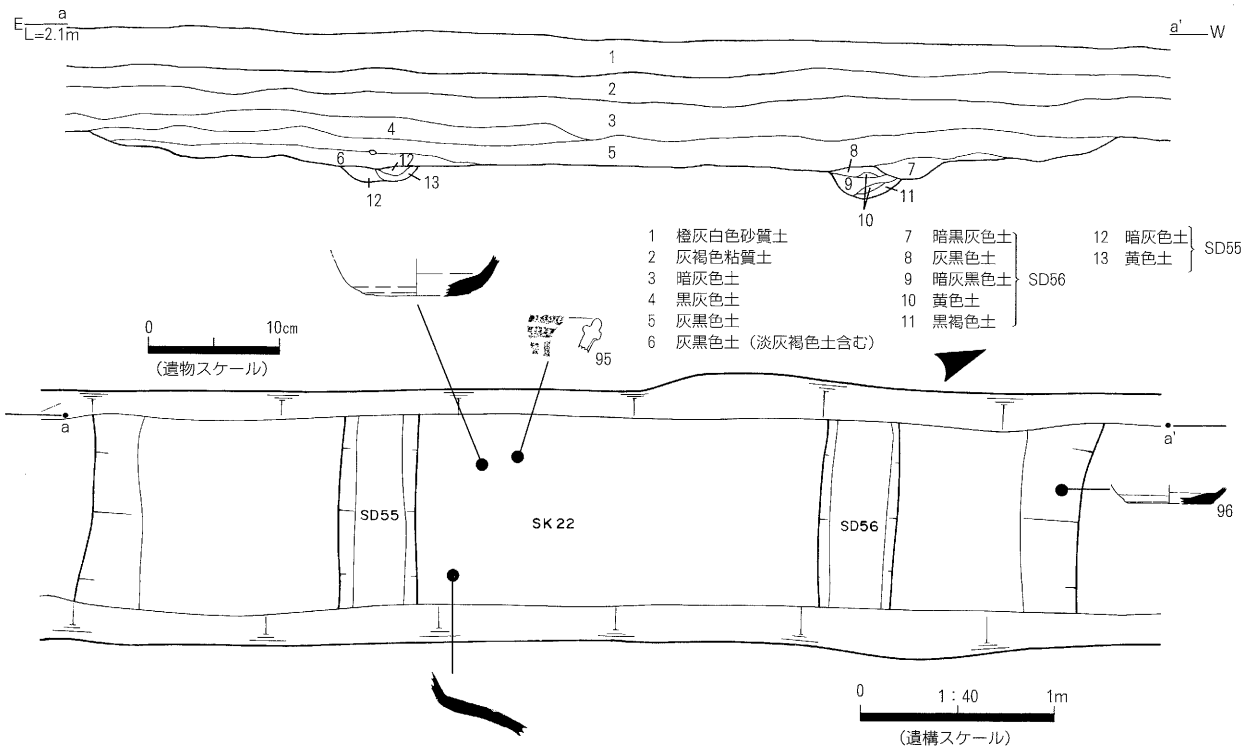
第12図　SB02(B区)平面図・P82土層断面図 S＝1/40



第13図　P72(B区)遺物出土図・土層断面図 S＝1/40
(遺物実測図S＝1/6、番号は第21図に対応)



第14図　SE01(B区)遺物出土図・土層断面図S＝1/40(遺物実測図S＝1/6、遺物番号は第21図に対応)



第15図　ＳＫ２２（Ｃ区）遺構平図・土層断面図Ｓ＝1/40

（遺物は図化可能なもののみ出土位置を示した。番号は第22図に対応Ｓ＝1/6）

Ｃ区

溝、竪穴状遺構、土坑、ピットを検出した。

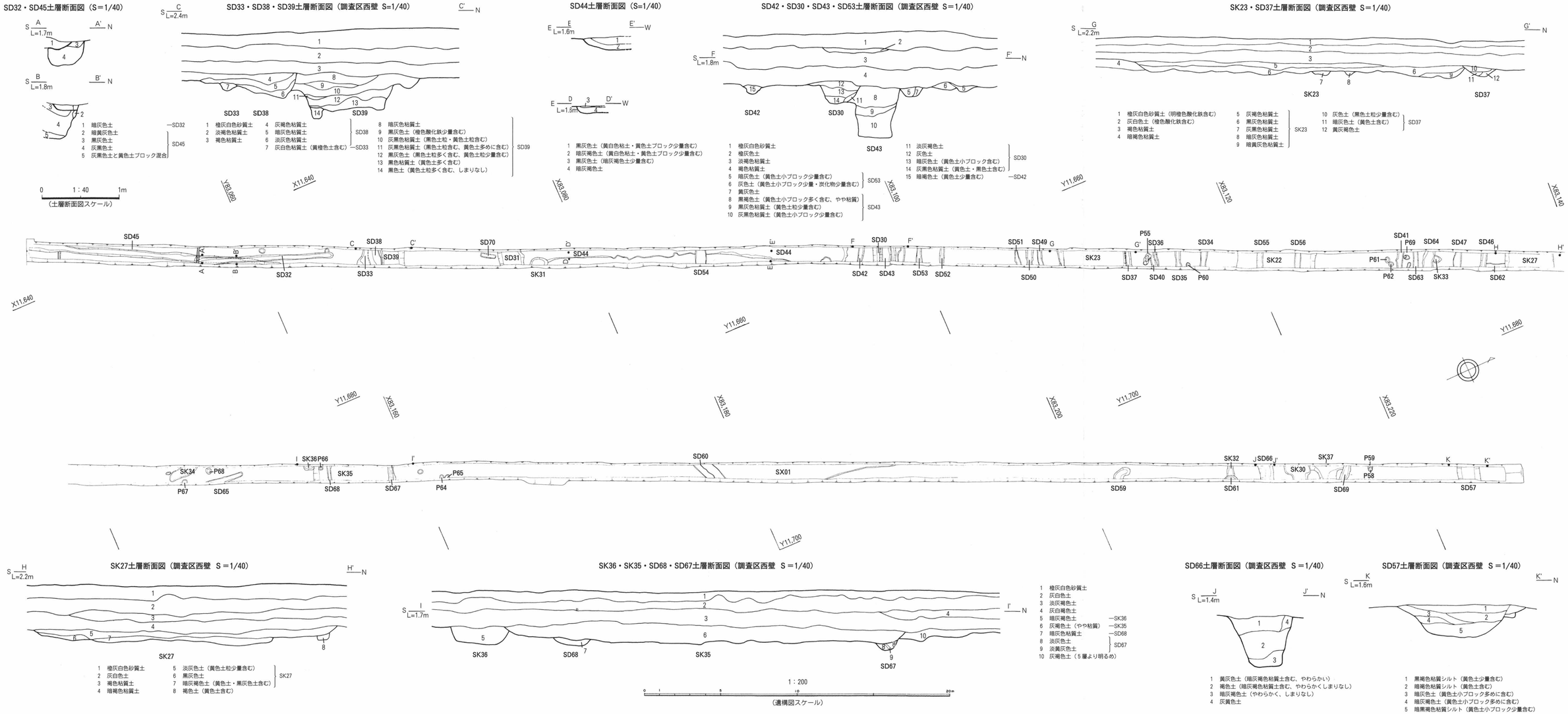
溝　北北東‐南南西方向の溝が3条、東南東‐西北西方向の溝が３１条検出されている。

ＳＤ３２・ＳＤ４５（第１６図、写真図版６）　ＳＤ３２はＳＤ４５を斜めに切って調査区の東側へと伸びる。幅0.3～0.4m、深さ0.05～0.15mを測る。覆土は暗灰色を呈する。ＳＤ４５はＢ区の方向から北北東方向へ向かって深くなる。ＳＤ３２に切られる手前から一段深くなり最も深い部分で深さ0.45mを測る。幅は0.55mを測る。覆土は黒灰色から灰黒色を呈する。ＳＤ３２からは土師器、ＳＤ４５からは須恵器、土師器、礫が出土している。

ＳＤ４４（第１６図）　南南西の端をＳＤ３１に切られ北北東の端は不整形に立ち上がる、深さ0.05～0.15m程度の浅い遺構である。検出長21.5mを測る。須恵器、土師器、礫が出土している。覆土は黒灰色から灰褐色で黄色土小ブロックを多く含む。

ＳＤ３８・ＳＤ３３・ＳＤ３９（第１６図）　ＳＤ３８は幅が1.0～1.5m、深さ0.25mの不整形な溝で、幅約0.24mの不整形な溝ＳＤ３３を切る。北側ではＳＤ３９を切る。ＳＤ３９は底面がほぼ平坦で底面の幅が1.0m、深さ0.4～0.45mの溝である。ＳＤ３３からは弥生土器、ＳＤ３９からは須恵器、珠洲焼が出土している。

ＳＤ３０・ＳＤ４３（第１６図、写真図版６）　ＳＤ３０は幅0.55m、深さ0.25mの溝でＳＤ４３を切る。ＳＤ４３は深さ0.6m、底面は平坦で断面形は逆台形を呈する。ＳＤ



第16図　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡C区遺構平面図（S＝1/200）及び土層断面図（S＝1/40）

３０からは須恵器、土師器、瀬戸美濃、礫、ＳＤ４３からは土師器が出土している。

ＳＤ６６（第１６図、写真図版６）　幅0.9～0.95m、深さ0.65mの溝で断面形は逆台形を呈する。遺物の出土は無い。

ＳＤ５７（第１６図、写真図版６）　幅1.45m、深さ0.4mで断面形は椀形を呈する。北側に浅い段があるが、土層断面図を見ると浅い溝を切って深い溝を掘り直しているようである。下層から土師器が出土している。

竪穴状遺構　５基を検出している。

ＳＫ２３（第１６図）　幅4.3m、深さ0.15mの、底面がほぼ平坦な遺構である。壁はゆるやかに内彎して立ち上がる。縄文土器、須恵器、土師器、木製品が出土している。

ＳＫ２２（第１５図、写真図版６）　幅5.1～5.2m、深さ約0.15mで底面は平坦である。壁はゆるやかに傾斜して立ち上がる。底面にはＳＫ２２に切られてＳＤ５５、ＳＤ５６の２条の溝が平行して走る。幅約0.4m、深さ0.05～0.15mを測る。縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、礫、木炭がある。

ＳＫ２７（第１６図）　幅3.15～3.2m、深さ約0.15mを測る。底面はやや凹凸があり、中央部が幅2.4mにわたって一段深くなっており、新旧が切り合っている可能性がある。壁はゆるやかに立ちあがる。弥生土器、須恵器、土師器、中世土師質土器が出土している。

ＳＫ３５（第１６図）　幅5.2～5.4m、深さ約0.2mで底面はほぼ平坦である。壁はゆるやかに立ち上がる。覆土はやや粘質の灰褐色土の単層である。南側部分でＳＫ３６を切っている。底面にはＳＫ３５に切られてＳＤ６８、ＳＤ６７の２条の溝が平行に走る。幅は約0.3m、深さは0.5～0.7mである。遺物は出土していない。

ＳＸ０１（第１６図）　深さ0.1～0.15mの浅い遺構である。全体像が不明なためＳＸ０１としたが大型の竪穴状遺構である可能性がある。須恵器、土錘、中世土師質土器、古瀬戸、木製品、礫が出土している。

Ｄ区

溝９条、竪穴状遺構１基、土坑３基、ピット１９基を検出した。

溝

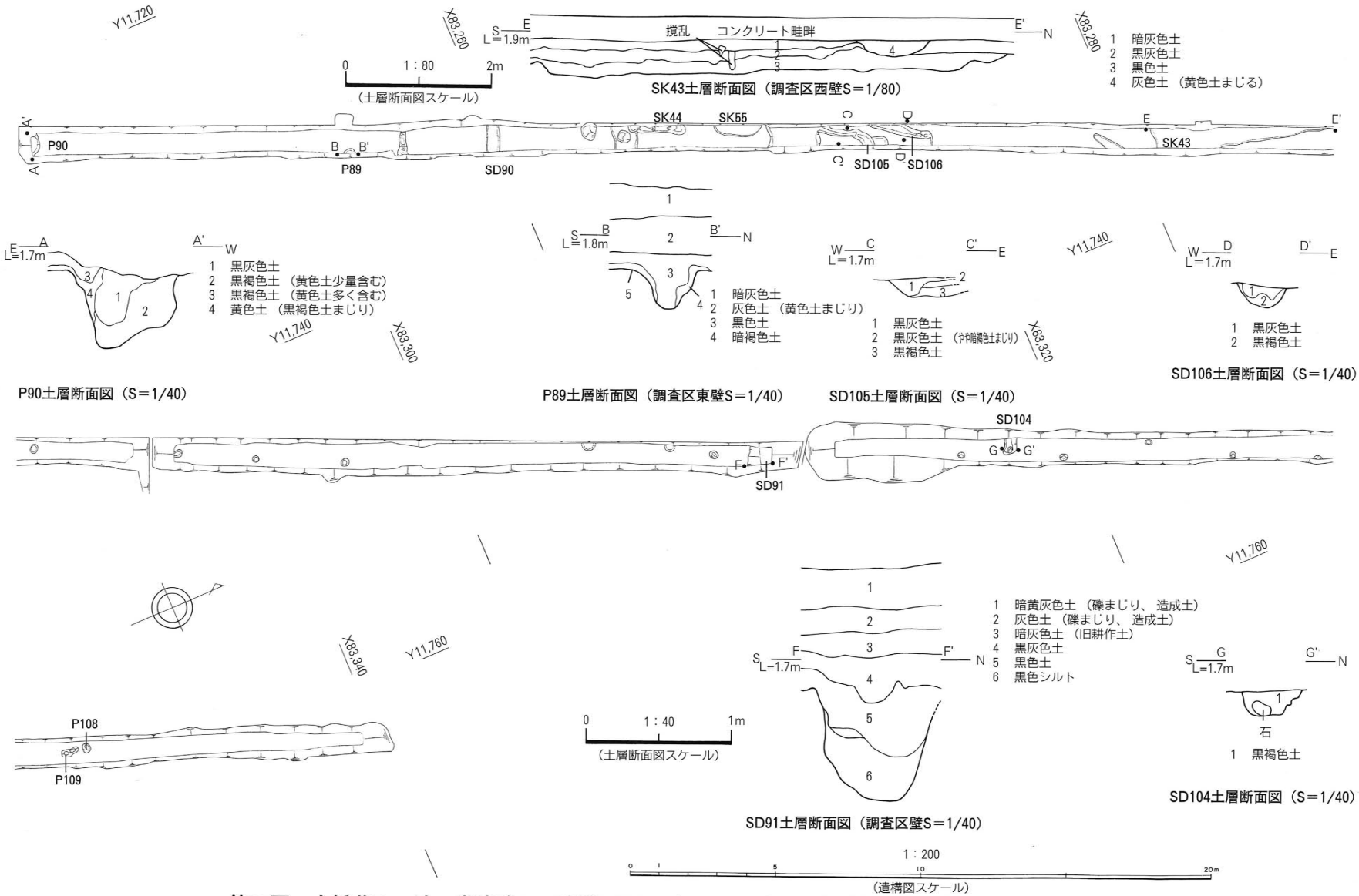
ＳＤ１０５・ＳＤ１０６（第１７図）　ＳＤ１０５は幅0.22～0.4m、深さ0.1mの溝である。ＳＤ１０６は幅0.25～0.4m、深さ0.17mの溝で北東方向から東へと向きを変える。土師器の椀が出土している。

ＳＤ９０（第１７図）　幅0.4～0.45m、深さ0.12mを測る。

ＳＤ９１（第１７図）　幅0.8m以上、深さ0.85mの大きな溝であるが、北側の肩部がコンクリート畦畔に切られ、検出できない。

竪穴状遺構

ＳＫ４３（第１７図）　ほぼ正方位の方形の土坑と考えられる。深さ0.1～0.15mである。Ｃ区のＳＸ０１と同じ主軸方向となる。



第17図　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡D区遺構平面図（S＝1/200）及び土層断面図（S＝1/40、S＝1/80）

表２　溝属性一覧

地区名	遺構番号	方向	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
A区	ＳＤ０１	N－76°－W		45	15		SD02を切る
	ＳＤ０２	N－81°－W			10	縄文土器、弥生土器	SD01に切られる
	ＳＤ０３	N－81°－W		65～80	15	縄文土器、石器	SD11・SD13を切る
	ＳＤ０４	N－74°－W		35～40	10～15		
	ＳＤ０５	—	385		10	弥生土器、被熱礫	
	ＳＤ０６	N－44°－W		130～160	10		
	ＳＤ０７	—		30	5～10	縄文土器、弥生土器	
	ＳＤ０８	N－32°－W		80	10		
	ＳＤ０９	N－52°－E		50	5		
	ＳＤ１０	N－24°－E	250		5	土師器?、礫	
	ＳＤ１１	N－ 7°－W			10	弥生土器	SD03に切られる
	ＳＤ１２	N－38°－E		20	5		
	ＳＤ１３	—			10～15	縄文土器、弥生土器	SD03, SK03に切られる
	ＳＤ１４	N－63°－W		20	5		SD15に切られる
	ＳＤ１５	N－60°－W		30	5	縄文土器、弥生土器、剥片	SD14を切る
	ＳＤ１６	N－64°－W		35～55	5～10	縄文土器、須恵器	
	ＳＤ１７	N－55°－E		40	5		
	ＳＤ１８	N－35°－E		25～40	5		
	ＳＤ１９	—			5		
	ＳＤ２０	N－38°－E	85	25	15		
	ＳＤ２１	N－64°－W		30～45	5		
	ＳＤ２２	N－44°－E		30	10	被熱礫	
	ＳＤ２３	N－55°－E		40	20	縄文土器？	
	ＳＤ２４	N－65°－W		40～55	5	縄文土器、木炭	
	ＳＤ２５	N－53°－E		30～40	10		
	ＳＤ２６	N－82°－W		150～165	65	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、チャート剥片、植物種子、礫	上層遺構
	ＳＤ２７	N－42°－W		180	20～40		
	ＳＤ２８	N－21°－E	260		5	縄文土器	
B区	ＳＤ７１	—		185～305	60		攪乱に中央部を切られる
	ＳＤ７２	N－55°－W		40～45	18	縄文土器、弥生土器、土師器、礫	上層遺構
	ＳＤ７４	N－63°－W		70～80	20	弥生土器	上層遺構
	ＳＤ７５	N－70°－W		30～35	10		下層遺構
	ＳＤ７６	N－74°－W		30～45	25		上層遺構
	ＳＤ７７	N－64°－W		80～95	60	須恵器	上層遺構
	ＳＤ７８	N－72°－W		35	5		ピットを切る　下層遺構
	ＳＤ７９	N－80°－W		40	10		下層遺構
	ＳＤ８０	N－72°－W		35～40	15		ピットを切る　上層遺構
	ＳＤ８１	N－70°－W		20～35	25	弥生土器	下層遺構
	ＳＤ８２	N－65°－W		25～30	5～10	弥生土器、須恵器、被熱礫、礫	
	ＳＤ８３	N－76°－W		32～45	20		下層遺構
	ＳＤ８４	—		82～95	30	土師器	南東から東に曲がる下層遺構
	ＳＤ８５	N－65°－W		90～100	40	弥生土器、須恵器、土師器、砥石、礫	上層遺構
	ＳＤ８６	N－87°－E		25～40	10		下層遺構
	ＳＤ８７	—		150～170	10		下層遺構
	ＳＤ８８	N－69°－W		40～75	5		下層遺構
	ＳＤ８９	N－ 4°－E	140	15～50	8		
	ＳＤ９２	N－68°－W		100		土師器	
	ＳＤ９３	N－77°－W		30～35	15～18	弥生土器	SD94に切られる
	ＳＤ９４	N－11°－E		37～45	3～8	弥生土器、土師器	SD93を切る
	ＳＤ９５	N－81°－W		35	10～13	弥生土器	

地区名	遺構番号	方向	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
B区	SD97	N－24° －E	990			弥生土器、須恵器、土師器、鉄製品	SE01に切られる、SD98を切る　下層遺構
	SD98	N－77° －W		40～50	5		SD97に切られる　下層遺構
	SD100	N－67° －W		30～35	10		
	SD101	—		30～63	30～35		
	SD102	N－60° －W		80～90	20～25		下層遺構
	SD103	—		25～35	7～18		
	SD107	N－44° －W		60～70	5		
C区	SD29	N－81° －W		25～35	15	縄文土器、須恵器、土師器	SK23に切られる
	SD30	N－66° －W		55	25	須恵器、土師器、瀬戸美濃、礫	SD43を切る
	SD31	N－80° －W		155	20		SD44を切る
	SD32	N－21° －E		30～40	5～15	土師器	SD45・SK28を切る
	SD33	N－69° －W		24	20	弥生土器	SD38に切られる
	SD34	N－62° －W		35～45	5～10	弥生土器、須恵器	
	SD35	N－70° －W		30～40	10	礫	
	SD36	(N－78° －W)		27	10		SD40に切られる
	SD37	N－72° －W		35	15		SK23を切る?
	SD38	N－85° －W		100～150	25		SD33・SD39を切る
	SD39	N－73° －W		(140～155)	40～45	須恵器、珠洲焼	SD38に切られる
	SD40	N－82° －W		30～38	10		SD36を切る P55に切られる
	SD41	N－63° －W		35～45	7		
	SD42	N－58° －W		30～37	5～10		
	SD43	N－69° －W		70	60	土師器	SD30に切られる
	SD44	(N－22° －E)	2150		5～15	須恵器、土師器、礫、木炭	SD31・SD54に切られる SK31に切られる
	SD45	N－29° －E		35～55	10～45	須恵器、土師器？、礫	SD32に切られる
	SD46	N－61° －W		35～40	15	須恵器、土師器	SD62を切る
	SD47	N－61° －W		40～50	5～13	礫	
	SD49	N－74° －W		30	5		
	SD50	N－67° －W		33～50	7		
	SD51	N－79° －W		18～30	5		
	SD52	N－66° －W		25～30	5～7		
	SD53	N－65° －W		30～40	7		
	SD54	N－68° －W		68	5～10		SD44を切る
	SD55	N－67° －W		40	5	縄文土器	SK22に切られる
	SD56	N－64° －W		38	15		SK22に切られる
	SD57	N－73° －W		145	40	土師器	
	SD59	—		50～65	5～15		
	SD60	N－65° －E		40	5～10		
	SD63	N－67° －W		30～35	5～7	弥生土器ｏｒ土師器	
	SD64	N－58° －W		65～75	5～7	須恵器	SK33を切る
	SD65	N－ 3° －E		30～47	5～10		
	SD66	N－74° －W		90～95	65		
	SD67	N－74° －W		30	7		SK35に切られる
	SD68	N－74° －W		23～30	5		SK35に切られる
	SD69	N－48° －W		45～55	5～10		
	SD70	N－31° －E	102	30	5～7		
D区	SD90	N－67° －W		40～45	12	土師器？	
	SD91	—			85		コンクリート畦畔に切られ、北側肩部検出できず
	SD104	N－67° －W		18～40	18	縄文土器	
	SD105	—		22～40	10		
	SD106	N－37° －E		25～40	17	土師器	北東から東へと曲がる

４．遺物

Ａ区（第１８～２０図）

河道跡　１、２は縄文土器である。１は中屋式の小型の深鉢である。口縁端部には刻み目、口縁部外面は縄文、体部外面には沈線と磨きが施される。２の体部外面には条痕文が施され、底面には編布様の圧痕が残る。３は粘板岩製の打製石斧である。長さ12.6cm、幅6.3cm、厚さ2.0cm、重さ195.27ｇを測る。４は凝灰岩製の石棒の破片である。研磨痕が一部に残る。断面形は楕円形になるものと思われる。５は弥生時代後期法仏式期の甕である。６は須恵器の有台坏である。体部のかなり外側に高台がつく。７は中世土師質土器の小皿である。口縁部に一段ナデを施し、その下部には指頭圧痕を残す。８はふいご羽口の先端部分である。９は箸状木製品である。同一個体であるが、直接接合しない。10は加工痕のある木製品である。長さ21.55cm、幅4.40cm、厚さ2.35cmを測る。下部に方形の切欠がある。

ＳＤ０３　11・12は弥生時代の溝から出土した石器である。２点とも溶結凝灰岩製の削器である。矢印部分にリタッチが見られる。11は縦2.95cm、横1.50cm、厚さ0.95cm、重量1.88g、12は縦5.5cm、横3.1cm、厚さ1.3cm、重量7.51gを測る。

ＳＤ１１　13は弥生土器の高坏である。坏部の一部と棒状脚を欠いている。坏部には把手を有する。脚部には一段の段を有し、段の上部と下部にそれぞれ４個ずつの穴を持つ。器面はかなり摩滅しているが坏部の内外面、脚部の外面と内面の一部にヘラ磨きの痕跡が見られる。また、坏部にはわずかに赤色顔料が残っている。

ＳＤ２６　14は縄文時代晩期の下野式に属する。縦位の条痕文を施こす。15は弥生土器の甕である。16は須恵器の甕の体部である。外面に平行叩き、内面に同心円当具痕が残り、上部にはロクロナデ、ナデが施される。17は須恵器の坏で、内外面に煤が付着している。

ＳＫ０１　18は弥生土器の壺である。内外面ハケメを施す。

ＳＫ０３　19は弥生土器の高坏である。弥生時代後期の法仏式期に属する。器面は摩滅しており調整法は不明である。

ＳＫ０４　20は弥生土器の器台である。内外面に丁寧なヘラ磨きを施す。

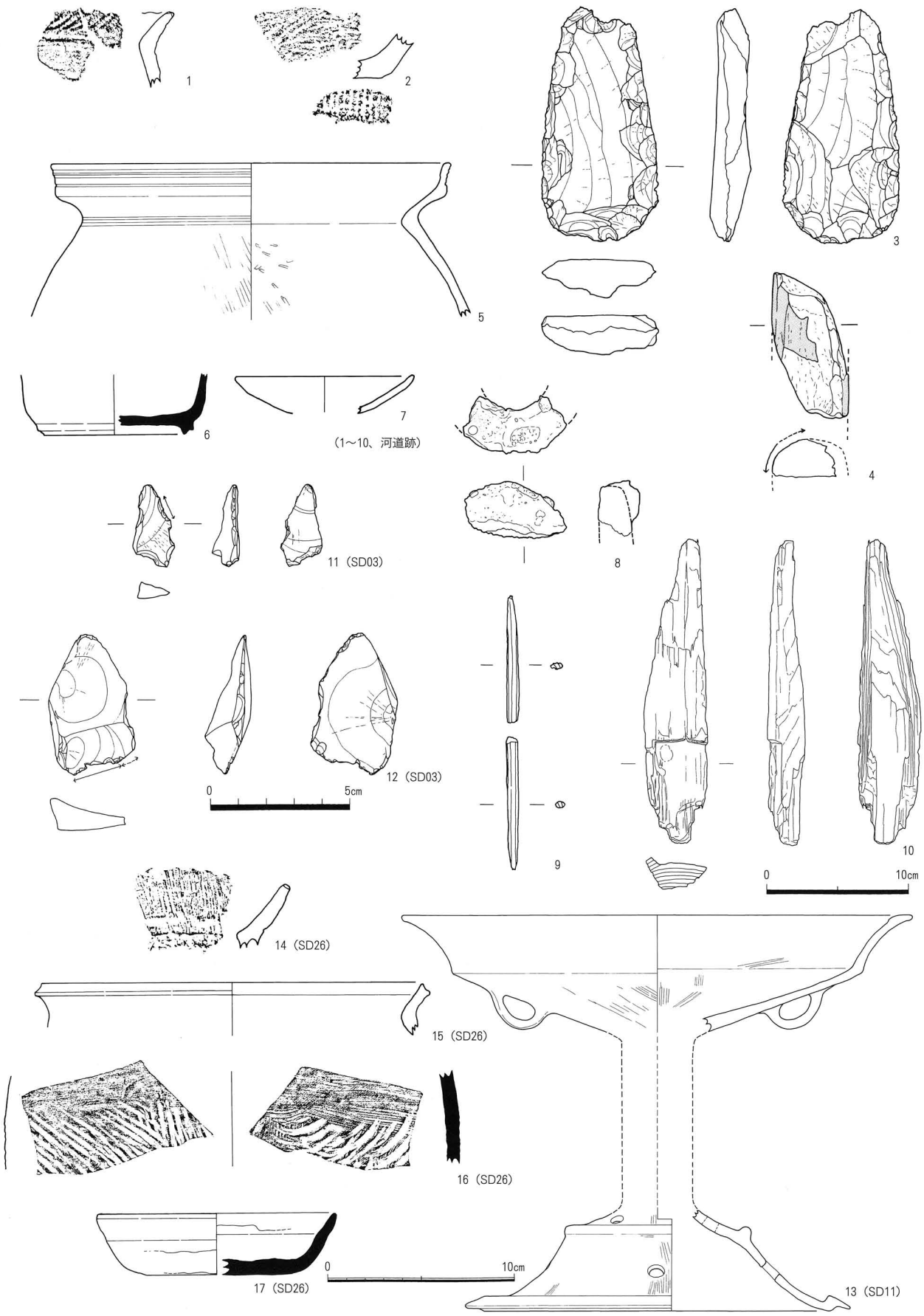
ＳＫ１０　21は縄文土器の深鉢である。口縁部附近に三条の沈線が施され、その下部は縦位の条痕文が施される。縄文時代晩期の下野式と考えられる。

Ｐ０４　23は平底製塩土器の底部である。内面は器表面が剥離している。

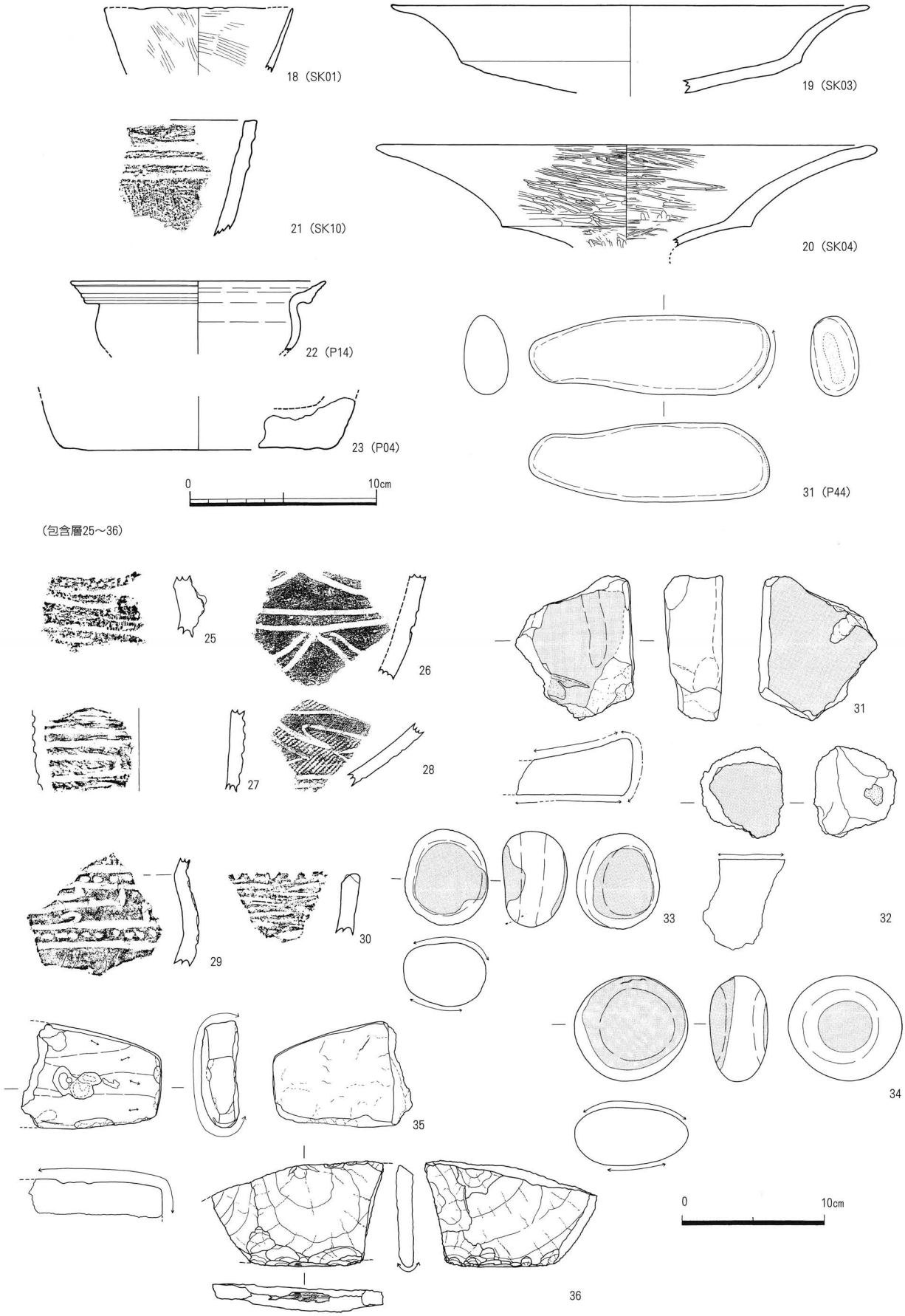
Ｐ１４　22は弥生土器の小型の鉢である。口縁帯外面に細い擬凹線文が入る。かなり薄手である。

Ｐ４４　24は閃緑岩の敲石である。使用によって石の表面が荒れている。

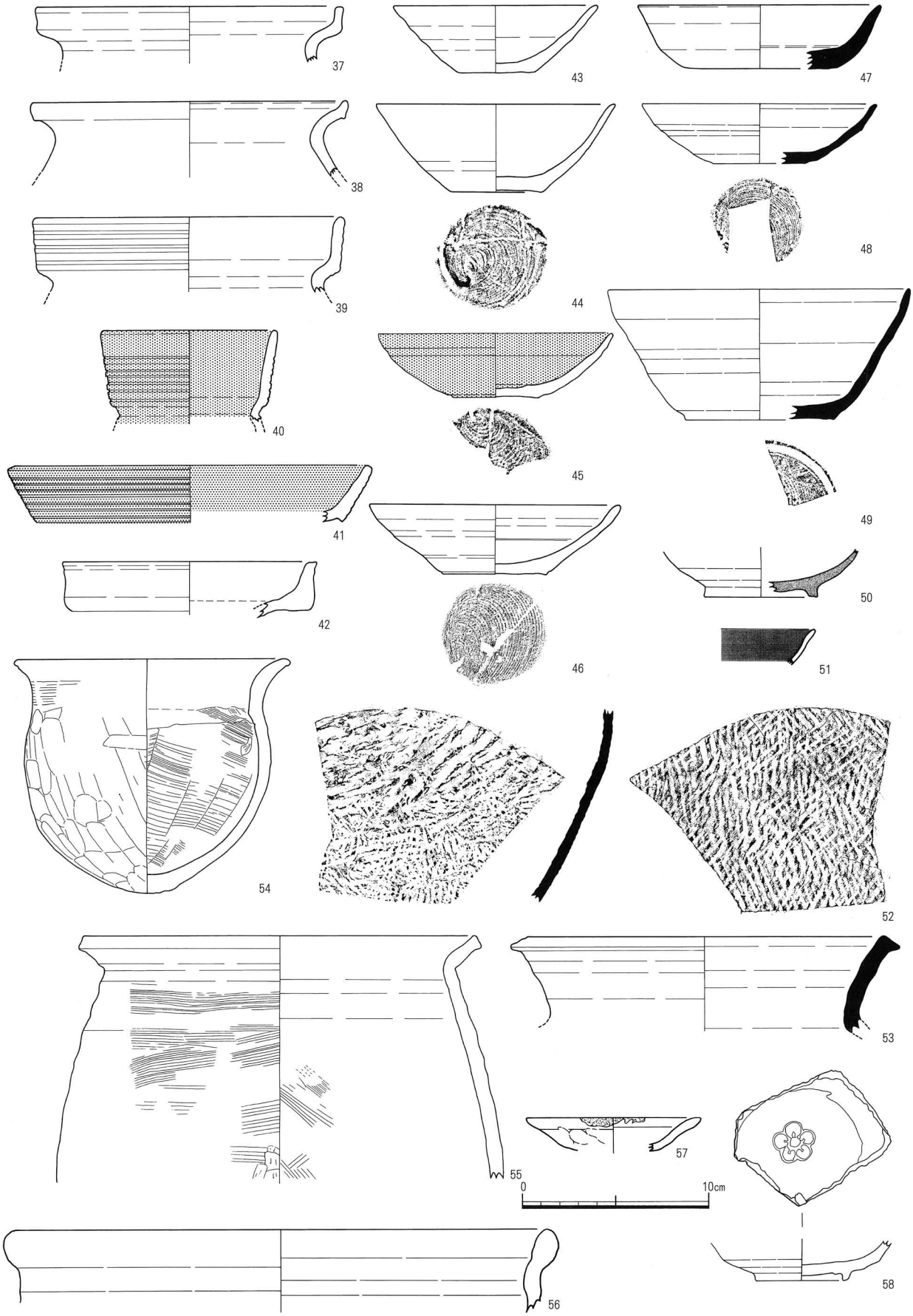
包含層　**縄文土器**(25～30)　25は隆帯の上に連続刺突文を施す。かなり崩れているが隆帯の中ほどから上に突起がつく。27は小型の鉢である。沈線と縄文の組合せからなる文様を施す。28は浅鉢と思われる。磨消縄文による雲形文が施される。29は小型の深鉢である。沈線、列点文、鍵手文を施す。縄文晩期の下野式に属する。30は粗製深鉢の口縁部である。口縁に刻み目を入れ、外面には横位の粗い条痕文を施す。



第18図　A区出土遺物実測図（11、12はS＝1/2、10、13はS＝1/4、他はS＝1/3）



第19図　A区出土遺物実測図（石器は36を除いてS＝1/4、他はS＝1/3）



第20図　A区出土遺物実測図（S＝1/3）

石器（31～36）　31は石皿の破片である。両面を使用している。側面もある程度の磨耗が見られる。破断の前と後に熱を受けた痕跡がある。縦10.2㎝、横8.3㎝、厚さ4.1㎝を測る。32は石皿または砥石の破片である。使用面の裏側には自然面が残る。破断前に被熱している。縦6.5㎝、横5.8㎝、厚さ6.5㎝を測る。33・34は磨石である。33は石英質安山岩で縦6.8㎝、横5.8㎝、厚さ4.5㎝、重量255.8gである。34は安山岩で縦7.5㎝、横8.0㎝、厚さ4.1㎝、重量328.4gである。35は４面に整形・研磨痕がみられる用途不明石製品で、後に凹み石として転用されたものである。２面は割れて加工面が失われている。被熱痕跡がある。縦7.5㎝、横9.9㎝、厚さ2.65㎝、重量204.3ｇを測る。36は粘板岩製の石包丁形石器である。左右は折損している。上下、特に刃部に多く剥離調整を施す。刃部の中央部はU字状に磨耗している。県内では上市町正印新遺跡に類例がある。弥生時代に属すると考えられる。

弥生土器（37～42）　37～39は甕である。40は赤彩小壺である。41は赤彩の鉢である。42は器台である。

須恵器（47～53）　47は排土中から出土した須恵器である。厚手で、口径に対して器高が低い。48は椀である。土師器の椀に似せた器形である。49は坏である。底部は回転糸切痕を残す。矮小化した高台がつく。上末釜谷２号窯に類似の器形がある。52・53は甕である。52の内面は上部に太めの弧状当具、下部に細めの放射状当具を使用している。

灰釉陶器（50）　高台はやや外側にふんばる。黒笹14号窯の製品である。

土師器（43～46・51・54～56）　54は小型の甕である。外面はヘラケズリ、内面はハケメを施す。古墳時代中期から後期に属する。43～46は土師器の椀である。45は器面がかなり摩滅しているが、内外面に赤彩の痕跡がわずかに残る。大まかには10世紀に属すると思われる。51は内面黒色土器の埦である。55・56は長胴甕である。56は口縁端部を内側に折り返し肥厚させる。

中世土師質土器　57は排土から出土した小皿である。灯明皿として用いられており、油煙が付着し、内面には灯芯の跡が残る。

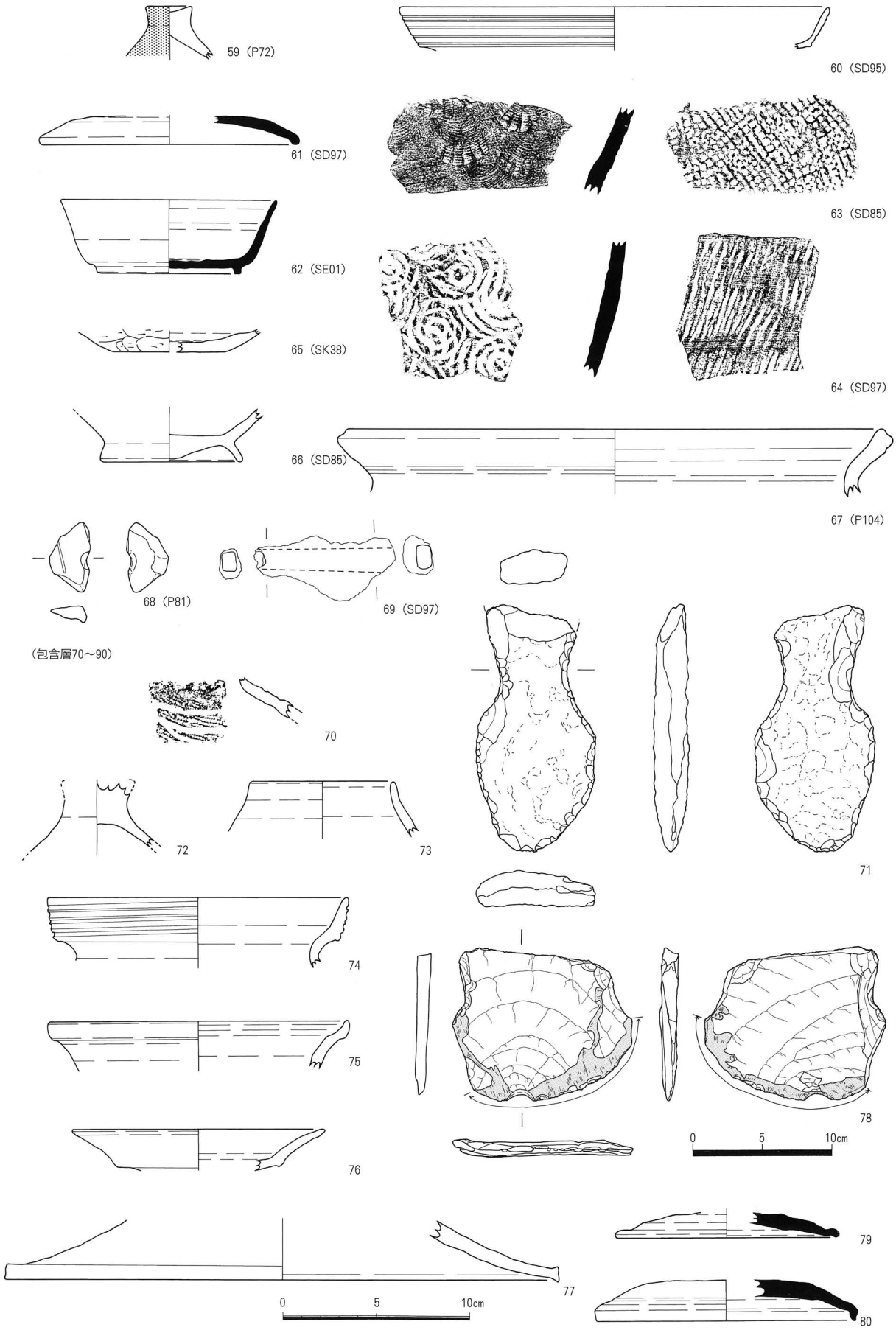
近世陶磁器　58は鉄釉の越中瀬戸焼の皿である。見込みに梅の印花文が入る。

Ｂ区（第２１～２２図）

ＳＤ８５　66は土師器の有台椀である。底部外面の中央は厚くなっておりヘラケズリの後、なで調整を行ったものであろうか。63は須恵器の甕体部の破片で、外面は格子状叩き痕、内面は扇状当具痕を残す。

ＳＤ９５　60は弥生土器の鉢である。風化によって器表面が剥落していることを考慮に入れてもかなり薄手である。口縁帯外面に細い擬凹線文が入る。

ＳＤ９７　61は須恵器の蓋である。口径は約14㎝を測る。口縁端部はやや丸みを帯びて肥厚する。64は須恵器の甕または瓶類の体部である。69は鉄製品で、両端とも折損している。



第21図　B区出土遺物実測図（78はS＝1/4、他はS＝1/3）

断面は長辺が1.0～1.3cmの長方形を呈する。

ＳＥ０１　62は須恵器の有台坏である。薄手で高台も小さい。使用による磨耗が著しい。

ＳＫ３８　65は土師器の小型甕底部である。底部切り離しは回転糸切りにより、体部外面にヘラケズリを施す。体部の立ち上がりがゆるやかであることから、小型甕の中でも法量の大きいタイプであろう。

Ｐ７２　59は弥生土器の小型の蓋である。ヘラ磨きが施されており、赤彩の痕跡がわずかに見える。

Ｐ８１　68は焼成前に穿孔された土器片である。土器の一部か、その他の土製品かは不明である。

Ｐ１０４　67は口径約30cmの甕または鍋である。口縁端部は面取りがされている。

包含層　**縄文土器**（70）　70は沈線と縄文からなる文様を施す。御経塚式期と考えられる。

弥生土器（72～77）　72は蓋で作りは雑である。73は壺で外面にヘラ磨きを施す。74、75は甕で、74は口縁帯に5条の擬凹線文を施す。76、77は高坏である。76は小型の高坏坏部、77は大型の高坏脚部である。

石器（71・78）　71は縄文時代の分銅形打製石斧である。砂岩製で上部は折損している。78は弥生時代の石包丁形石器の転用品である。縦11.00cm、横12.95cm、厚さ1.25cmを測る。直径1.8cm（残存部分）の紐孔を有する大型石包丁形石器を再利用している。紐孔のある辺を刃部として使用している。両面に使用による磨耗、擦痕が見られる。擦痕は刃部に対してほぼ垂直のものが多い。両側縁部は、柄に緊縛するためか打ち欠いて幅を狭めている。

須恵器（79～83）　79、80は蓋で、79は口径12cm、口縁端部付近内面が凹線状にくぼみ、端部はわずかに肥厚するのみである。80は口径14cm、端部を尖らせ下へ折り返す。81は無台の坏、82は有台の坏で2点ともやや厚手である。83は双耳瓶である。

灰釉陶器（84、85）　84は直径6.5cmの重ね焼き痕が内面に残り、その付近まで釉がかかる。外面は高台の外側まで施釉される。高台は付け高台で外底面はロクロヘラケズリが施されている。85は三角形状の高台になると思われ、釉は内外面口辺部に浸し掛けされる。２点とも黒笹90号窯の製品である。

土師器（86）　86は甕で、外面は細かいカキメ、内面はカキメとハケメを併用している。

土錘（87、88）　87は長さ6.1cm、直径4.7cm、88は長さ6.2cmを測る。

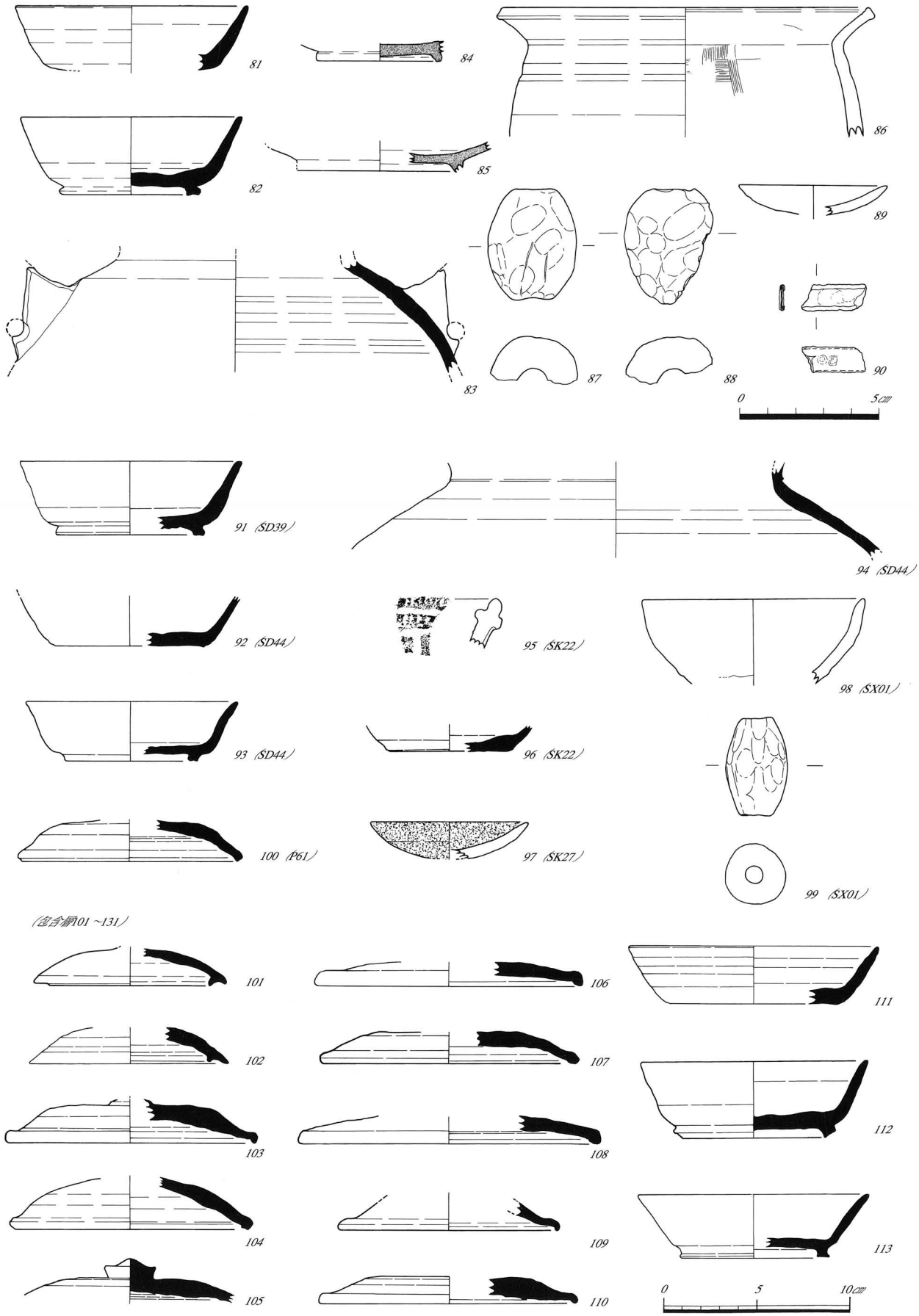
中世土師質土器（89）　89は小皿で、ナデ調整によって端部を細く引き出している。

鉄製品（90）　両端とも欠損している。両側面は鉄板を巻き込んで整形している。

Ｃ区（第２２～２３図）

ＳＤ３９　91は須恵器の有台坏で、胎土は粗くやや厚手である。底部はヘラ切りである。

ＳＤ４４　92～94は須恵器である。92は無台の坏で薄手である。93は有台の坏で、高台は



第22図　B区・C区出土遺物実測図（90はS＝1/2、他はS＝1/3）

小さく内側へ入る。94は短頸壺か。自然釉が内外面ともに掛かる。

ＳＫ２２　95は縄文土器である。外面口縁端部と隆帯上に貝殻腹縁による押圧文を施す。串田新Ｉ式に属する。96は須恵器の無台坏で底部はヘラ切りである。

ＳＫ２７　97は中世土師質土器の小皿で灯明皿として使用されている。内外面にタール状の煤が付着している。

ＳＸ０１　98は古瀬戸の天目茶碗である。褐色の鉄釉がかかる。99は土錘である。長さ5.3㎝、直径3.25㎝、孔径0.9㎝と小ぶりで、丁寧な作りである。

Ｐ６１　100は須恵器の蓋である。端部は小さな三角形状を呈する。つまみの痕跡がある。

包含層　縄文土器（129）　129は縄文土器の深鉢である。底部には二条の樹皮を一単位として編んだ網代編の痕跡が残る。

石器（130・131）　130、131は縄文時代の磨製石斧である。130は蛇紋岩製の小型定角式で長さ7.10㎝、幅3.80㎝、厚さ1.95㎝、重さ72.88ｇを測る。131は石英質安山岩製の定角式で残存部分の長さ6.65㎝、幅6.55センチ、厚さ2.90センチ、重さ181.95ｇを測る。刃部は使用による刃こぼれが見られる。

須恵器（101～117）　101～110は蓋である。101、102は内面に反りを有する。103はボタン状つまみを有し内面はやや磨耗する。104は端部が平らに肥厚する。109は笠状を呈する。111は無台坏である。内面が滑らかに磨耗する。113は内面は滑らかに磨耗している。114は壺類の底部附近である。115、116は横瓶の頸部である。117は甕の体部である。外面は平行叩き、内面は弧状の当て具痕が残る。

土師器（118・119）　118、119は甕である。

土錘（120・121）　120は長さ5.8㎝、121は長さ6.3㎝、直径4.3㎝、孔径1.9㎝を測る。

中世の遺物（122～126）　122は珠洲焼の片口鉢である。口縁部内面に櫛描波状文が施される。卸し目は６本で１単位である。123、124は中世土師質土器の小皿である。123は灯明皿として使用されており、タール状の煤が口縁部内外面に残る。125は瀬戸美濃で、透明感のある淡緑色の灰釉が全面にかかる。高台は重焼きによるものか、剥落している。126は銅銭『永楽通宝』（明　初鋳1408年）である。

近世の遺物（127・128）　128は伊万里焼の染付小椀で外面に七宝地紋、内面に帯状に格子文を描く。江戸後半期と考えられる。127は越中瀬戸焼の土錘である。

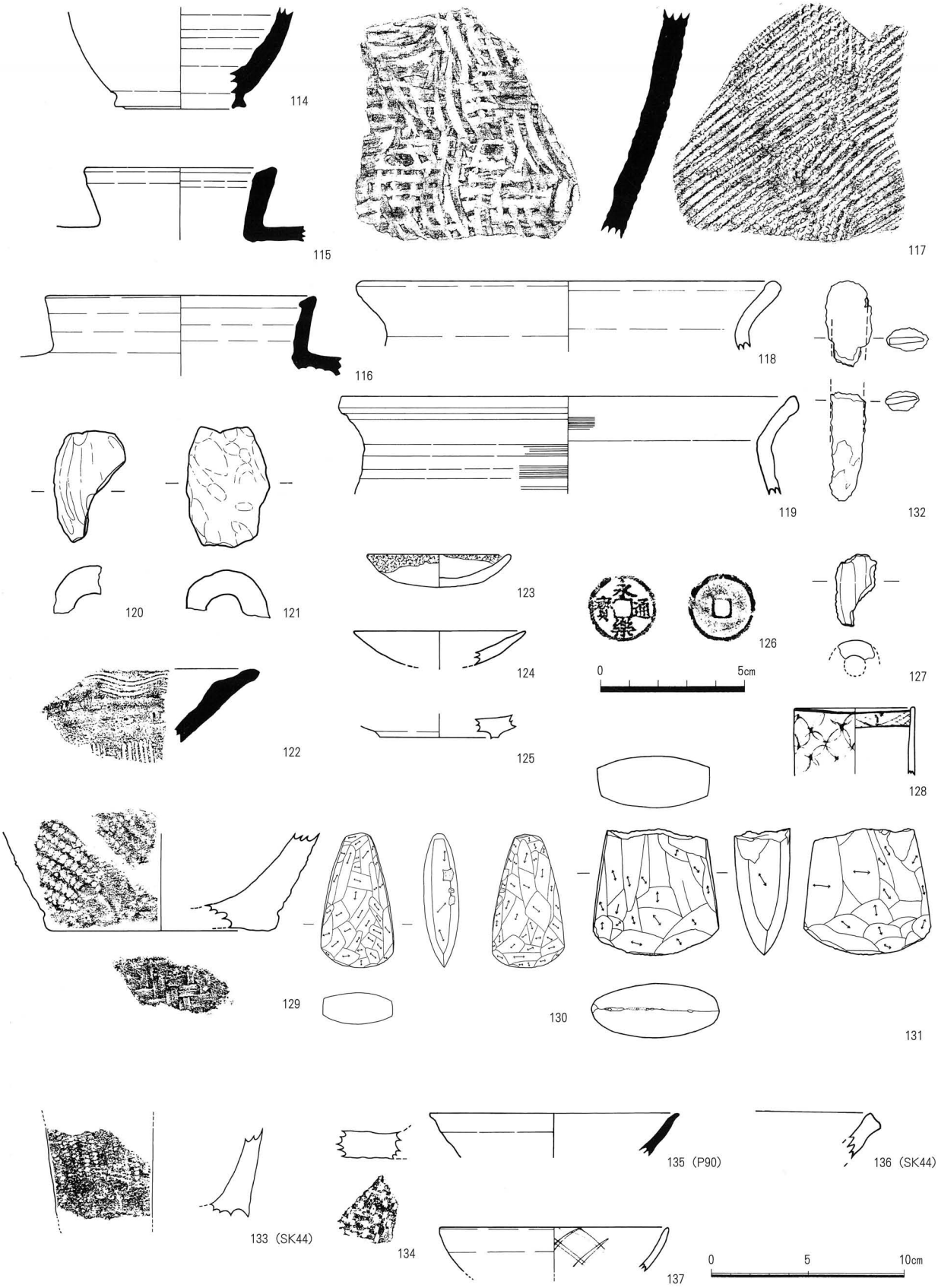
鉄製品（132）　刀子状の鉄製品で同一個体であるが、接合しない。長さはそれぞれ4.5㎝、5.7㎝、刃の幅は1.6㎝、1.8㎝を測る。

Ｄ区（第２３図）

ＳＫ４４　133は縄文土器の小型の深鉢である。136は土師器の甕または鍋である。

Ｐ９０　135は須恵器の坏である。

包含層　134は縄文土器底部外面に網代編の圧痕が残る。137は伊万里焼の皿である。内面に格子文が描かれる。



第23図　C区・D区出土遺物実測図（126はS＝1/2、他はS＝1/3）

第24図　製塩土器実測図（S＝1/2）

製塩土器

主にＡ区（一部Ｂ区を含む）から多くの製塩土器の破片が出土した。遺構出土遺物として前出したものも含め、ここで一括して紹介する。小片が多く、全体形がわかるものがないが、多くは平底バケツ形の製塩土器のようである。棒状尖底の製塩土器と断定できる個体はなかった。

138～142は口縁部である。138は粘土紐接合痕が明瞭に見える。口縁端部は薄くなり、外反する。器壁は厚いところで8㎜、薄いところで3㎜である。外面は斜めから縦方向になでつけている。内面には横方向のヘラケズリのような痕跡がみえる。139は内面にハケメを施す。141は端部を丸く外側に折り込んだような形態である。142は口縁端部が面取りされている。外面に斜めにハケメを施す。142は胎土が他のものと違っていることから製塩土器ではない可能性もある。143は底部付近でＢ区から出土している。粘土紐接合痕を消すように上から下に削っている。144は平底の底部で、何枚かの粘土板を接合して底部を作っているのか、接合痕跡が明瞭に残る。23は内面が剥離している。23が出土したＰ０４から10点の製塩土器破片が出土していることが特筆される。他は1点ずつ出土した遺構が若干ある程度で包含層からの出土がほとんどである。146、147は径の小さい破片でどのような器形のどの部位であるか不明である。147は内外面ともケズリを施す。

Ⅳ　自然科学分析

1．水橋荒町•辻ヶ堂遺跡の古環境調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

水橋荒町・辻ヶ堂遺跡（富山市水橋辻ヶ堂所在）、は常願寺川河口に近い低地に立地する。今回の調査は、旧河道内のボーリング調査で得られた腐植混じり層の古環境を知る目的で、珪藻分析、花粉分析を実施する。また、畠跡とみられる遺構の土壌を対象に、植物珪酸体分析と種実同定を行うことにより、当時の栽培植物に関する情報を得る。

（1）試料

珪藻分析と花粉分析は、ボーリング地点No. 5から採取された深度2.0～2.05mと、ボーリング地点No. 9で得られた深度2.3～2.7mの2点を分析する。植物珪酸体分析と種実同定には畠跡の畝間にあたるSD23の中層と下層から採取された2点を用いる。

（2）分析方法

①珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer, K.（1992）、Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.（1986,1988,1991a,1991b）などを参照する。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数200個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出した化石が現地性の化石か異地性の化石かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたっては、海水～汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai, K. & Watanabe, T.（1995）の環境指標種を参考とする。

②花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数

する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し、図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

③植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や稲作について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

④種実同定

土壌試料約300ｇを秤量後、数％の水酸化ナトリウム水溶液を入れて放置し、試料を泥化させる。0.5㎜の篩を通して水洗し、残渣を集める。残渣を双眼実体顕微鏡で観察し、同定可能な微細遺物を抽出・同定する。同定された遺物、種類ごとに瓶にいれ、ホウ酸・ホウ砂水溶液中に保存する。

（３）結果

①珪藻分析

結果を表１、図１に示す。２試料とも珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は２試料とも50％である。産出分類群数は、28属107種類である。試料ごとに特徴を述べる。

No.5の2.0～2.05ｍにおける淡水生種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）は、貧塩不定性種（小量の塩分には耐えられる種）、真＋好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種）、流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）と真＋好流水性種（流水域に最もよく生育する種）が優占あるいは多産する。主な産出種は、好流水性で中～下流性河川指標種群（河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、その環境を指標することができる種群）のMeridion circulae var.constrictum、好流水性のNavicula elginensis var.neglecta が約10％産出し、淡水～汽水域まで生育する塩分耐性の高い好塩性のRhopalodia gibberula、流水不定性のAmphora affinis、Gomphonema parvulum 等を伴う。また、割合は少なかったが、沼よりも浅く水深が１ｍ前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られる沼沢湿地付着

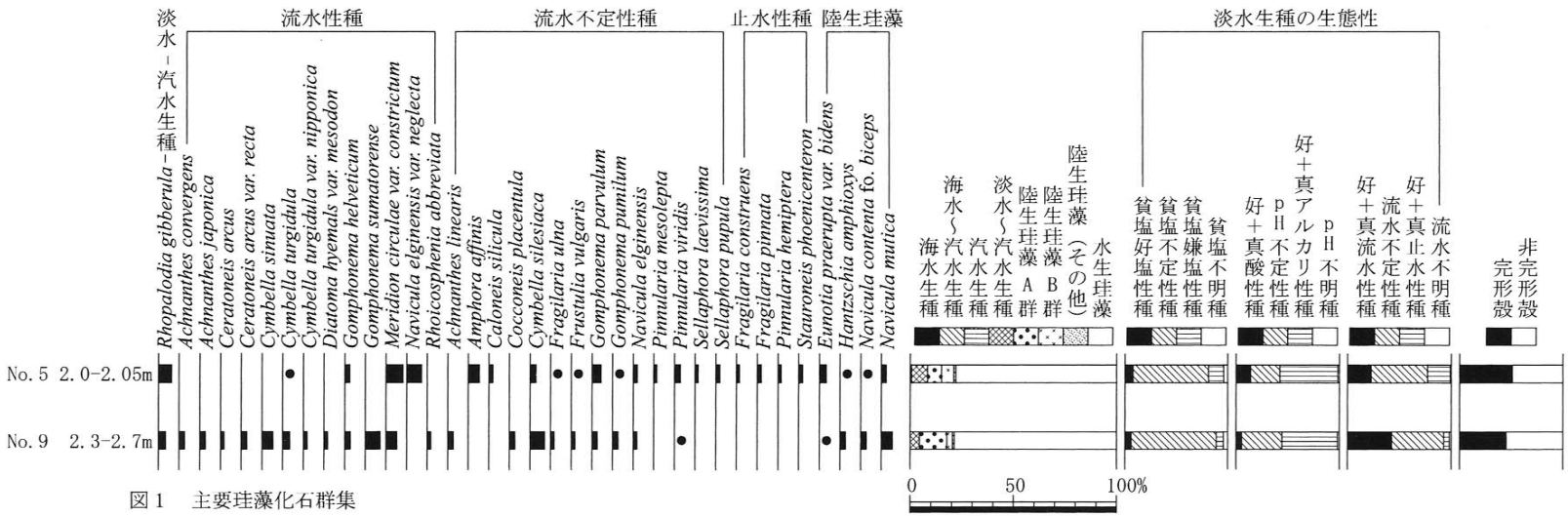


図１　主要珪藻化石群集

汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも 100 個体以上検出された試料について示す。なお、●は１％未満、＋は 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

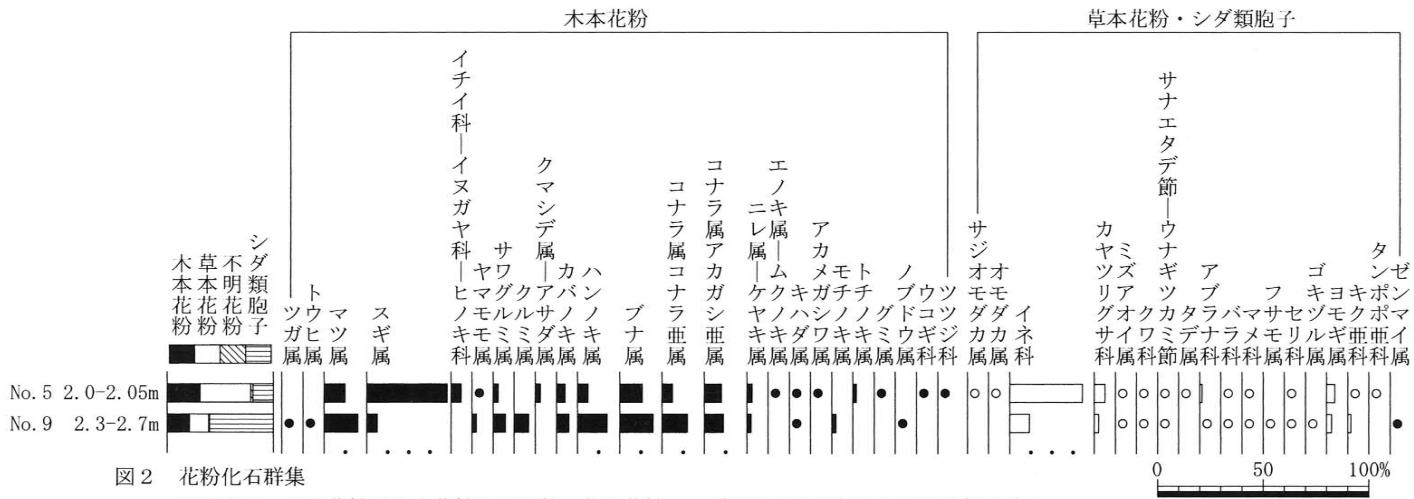


図２　花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満を示す。

表１　珪藻分析結果（１）

種　　類	生態性			環境指標種	No.5	No.9
	塩分	pH	流水			
Nitzschia plana W.Smith	Euh-Meh				1	-
Gomphonema pseudoaugur Lange-Bertalot	Ogh-Meh	al-il	ind	S	1	-
Gyrosigma nodiferum (Grun.)G.West	Ogh-Meh	al-il	ind		-	1
Navicula capitata var. hungarica (Grun.)Ross	Ogh-Meh	al-il	r-ph	U	1	-
Nitzschia frustulum (Kuetz.)Grunow	Ogh-Meh	al-bi	ind		1	-
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		13	4
Achnanthes convergens H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	3
Achnanthes exigua Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	-
Achnanthes japonica H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-bi	J,T	-	3
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	1
Achnanthes linearis W.Smith	Ogh-ind	al-bi	ind		-	3
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	1
Achnanthes spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	11	-
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	1
Aulacoseira crenulata (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		1	-
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	1	-
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	1
Caloneis lauta Carter & Bailey-Watts	Ogh-ind	ind	ind		-	1
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	1	1
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		4	-
Ceratoneis arcus Kuetzing	Ogh-hob	ind	r-bi	K,T	-	2
Ceratoneis arcus var. recta (Cl.)Krasske	Ogh-ind	ind	r-bi	T	-	3
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	3
Craticula cuspidata (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	2	-
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind		1	-
Cymbella heteropleura var. minor Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-
Cymbella leptoceros (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	-	1
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	1	-
Cymbella perpusilla A.Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	6	8
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	6
Cymbella subaequalis Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	1	-
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	1	4
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	2
Diatoma hyemals var. mesodon (Ehr.)Kirchener	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	2
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		2	-
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		1	1
Epithemia adnata (Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		-	1
Eunotia bilunaris (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		2	1
Eunotia biseriatoides H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-
Eunotia gracialis Meister	Ogh-hob	ind	l-bi		1	-
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	2	-
Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	7	1
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1
Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	1	-
Fragilaria construens (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	3	-
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	1	-
Fragilaria pinnata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	4	-
Fragilaria ulna (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		1	2
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	1	1
Frustulia rhomboides var. saxonica (Rabh.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	-
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	2
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-
Gomphonema clevei var. javanica Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	1
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	1	-
Gomphonema helveticum Brun	Ogh-unk	ind	r-ph	T	5	3
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	9	3
Gomphonema pumilum (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	al-il		1	3
Gomphonema sumatorense Fricke	Ogh-ind	ind	r-bi	J	-	8
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	2	3
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	17	6

表１　珪藻分析結果（２）

種　　類	生態性			環境指標種	No.5	No.9
	塩分	pH	流水			
Navicula bryophila Boye-Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	RI	1	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	1	1
Navicula contenta fo. biceps (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	2	3
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-
Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	4	2
Navicula elginensis var. cuneata H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	ind		-	1
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	15	-
Navicula explanata Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	U	1	-
Navicula gibbula Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1
Navicula ignota Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	1
Navicula lapidosa Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	5	6
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		1	-
Navicula viridula (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	1	-
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	1	-
Neidium iridis (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	2	-
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	1	1
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	1	-
Nitzschia denticula (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RA,U	-	1
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	1	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-
Pinnularia braunii (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		2	-
Pinnularia brebissonii (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	2	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	2	-
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		2	-
Pinnularia graciloides Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-
Pinnularia hemiptera (Kuetz.)Cleve	Ogh-hob	ind	l-ph		3	-
Pinnularia macilenta (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	3	-
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1	-
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	1
Pinnularia rivularis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-
Pinnularia ueno Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	6	1
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	-	2
Rhopalodia gibba (Ehr.)O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		1	-
Sellaphora laevissima (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind		3	-
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	4	-
Stauroneis javanica (Grun.)Cleve	Ogh-unk	unk	unk		1	-
Stauroneis lauenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		1	-
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	4	-
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	2	-
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-
Tabellaria flocculosa (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	2	1
海水生種					0	0
海水～汽水生種					1	0
汽水生種					0	0
淡水～汽水生種					16	5
淡水生種					188	108
珪藻化石総数					205	113

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性	pH：水素イオン濃度に対する適応性		C.R.：流水に対する適応性	
Euh-Meh：海水生種－汽水生種	al-bi	：真アルカリ性種	l-bi	：真止水性種
Ogh-Meh：淡水－汽水生種	al-il	：好アルカリ性種	l-ph	：好止水性種
Ogh-hil　：貧塩好塩性種	ind	：pH不定性種	ind	：流水不定性種
Ogh-ind　：貧塩不定性種	ac-il	：好酸性種	r-ph	：好流水性種
Ogh-hob　：貧塩嫌塩性種	ac-bi	：真酸性種	r-bi	：真流水性種
Ogh-unk　：貧塩不明種	unk	：pH不明種	unk	：流水不明種

環境指標種群

J:上流性河川指標種，K:中～下流性河川指標種，O:沼沢湿地付着生種（以上は安藤，1990）

S:好汚濁性種，U:広域適応性種，T:好清水性種（以上はAsai，K. & Watanabe，T.，1986）

R:陸生珪藻（RA:A群，RB:B群，RI群、伊藤・堀内，1991）

生種群のNavicula elginensis、Pinnularia viridis、Stauroneis phoenicenteron、Eunotia praerupta var.bidens などを含む。No.9の2.3～2.7mにおける淡水生種の生態性は、真＋好流水性種が多産する他は前試料に近似する。とくに多産するものはなく、流水性で中～下流性河川指標種群のMeridion circulae var.constrictum、Cymbella turgidula、上流性河川指標種群（河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群）のAchnanthes japonica、Gomphonema sumatorense、流水不定性のCymbella silesiaca などが産出する。

②花粉分析

結果を表２、図２に示す。分析の結果、双方の試料から花粉化石が検出される。No.9の2.3～2.7mでは、花粉化石の保存が悪く、総花粉・胞子数に占めるシダ類胞子の割合が高くなっている。木本花粉ではマツ属、スギ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属などが検出されるが、際だって多い種類は認められない。一方草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが検出される。No.5の2.0～2.05mでは総花粉・胞子数に占める草本花粉の割合が高い。木本花粉組成は、No.9の2.3～2.7mと類似するが、スギ属の割合が相対的に高くなっている。草本類ではイネ科の割合が高く、カヤツリグサ科やヨモギ属なども検出される。

③植物珪酸体分析

結果を表３に示す。SD23の中層と下層では、植物珪酸体が検出されるものの、検出個数が少ない。また、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。全体的にタケ亜科の検出数が多く、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などがわずかに認められる。また、栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が下層で１個体のみ認められる。

④種実同定

SD23 中層、SD23 下層ともに篩に残った残渣は少なく、泥化できなかった土塊と鉱物が若干見られる程度である。炭化材片は数個認められるが、いずれも１mm以下と微細であり、種類の特定は難しい。

（４）考察

ボーリング調査の成果では、No.5の１点は旧河道の底付近の堆積物、No.9の１点はそれよりも下位に相当すると考えられている。放射性年代測定結果をみると、河道基底付近

表２　花粉分析結果

種　類	試料番号 No.5	No.9
木本花粉		
ツガ属	-	1
トウヒ属	-	1
マツ属単維管束亜属	-	1
マツ属複維管束亜属	4	5
マツ属（不明）	8	10
スギ属	47	5
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	6	-
ヤマモモ属	1	2
サワグルミ属	3	6
クルミ属	-	7
クマシデ属－アサダ属	3	-
カバノキ属	5	6
ハンノキ属	6	14
ブナ属	13	16
コナラ属コナラ亜属	6	12
コナラ属アカガシ亜属	10	9
ニレ属－ケヤキ属	3	2
エノキ属－ムクノキ属	1	-
キハダ属	1	1
アカメガシワ属	1	-
モチノキ属	-	2
トチノキ属	2	-
グミ属	1	-
ノブドウ属	-	1
ウコギ科	1	-
ツツジ科	1	-
草本花粉		
サジオモダカ属	1	-
オモダカ属	1	-
イネ科	134	45
カヤツリグサ科	20	10
ミズアオイ属	1	1
クワ科	2	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	2	1
タデ属	1	-
アブラナ科	4	1
バラ科	2	3
マメ科	2	4
フサモ属	-	1
セリ科	1	1
ゴキヅル属	-	1
ヨモギ属	15	11
キク亜科	3	7
タンポポ亜科	1	-
不明花粉	9	5
シダ類胞子		
ゼンマイ属	-	1
他のシダ類胞子	76	289
合　計		
木本花粉	123	101
草本花粉	190	87
不明花粉	9	5
シダ類胞子	76	290
総計（不明を除く）	389	478

表３　植物珪酸体分析結果

種　類	SD23 中層	下層
試料番号		
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ族イネ属	-	1
タケ亜科	20	24
ヨシ属	2	5
ウシクサ族ススキ属	18	8
不明キビ型	25	11
不明ヒゲシバ型	2	3
不明ダンチク型	2	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ族イネ属	-	1
タケ亜科	16	14
ヨシ属	-	2
ウシクサ族	3	4
不明	10	4
合　計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	69	54
イネ科葉身機動細胞珪酸体	29	25
総　計	98	79

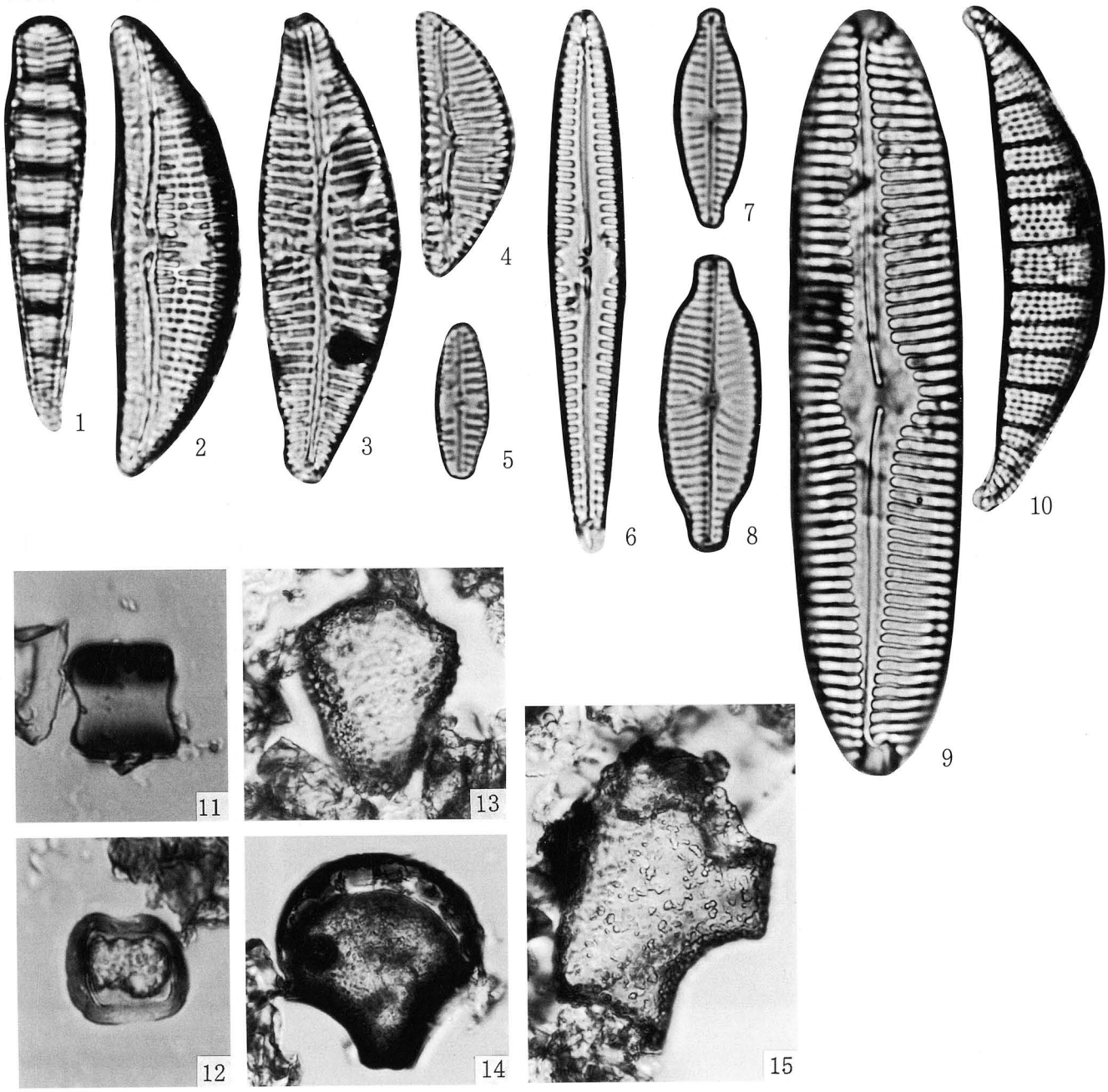
の年代値は約3,000年前、河道基底よりも下位に相当する堆積物は約4,000年前にあたる。

No.9の2.3～2.7mにおける微化石分析の成果をみると、珪藻化石では流水性種が見られ、中～下流性河川指標種群や上流性河川指標種群が検出される。常願寺川は短く勾配が急な河川であることから、様々な水域が近距離に存在し、これらの水域の堆積物が急激に流下して河口部に集積するために、さまざまな生態性を持つ珪藻化石が集まっているものと考えられる。この傾向は花粉化石でも同様である。立山山麓に分布していたと思われるブナ、ナラ類、カバノキ属などの落葉広葉樹、ハンノキ属、サワグルミ属、クルミ属など河畔に生育していた種類、アカガシ亜属など河口部付近に生育していた常緑広葉樹など、常願寺川水系でみられるさまざまな森林植生からもたらされた種類が混在している。

No.5の年代値からすれば、河道の形成時期として縄文時代後晩期であったと推測される。この時期は「弥生の小海退」と呼ばれる時期で、冷涼で多雨な気候が推定されている(那須, 1989など)。この時期には海岸線の後退と多雨化により各地で河川作用が活発化し、扇状地や三角州が発達している。本地域もこれと同様な作用があったとみられ、河道が作られたられた背景として、このような気候変化が要因になっていたものと考えられる。河道内の微化石分析の結果は、基本的にはNo.9の2.3～2.7mと大きな変化はなく、様々な集水域からもたらされた群集からなっている。ただし、花粉化石の組成をみると、スギ属が多産している。これまで行われた北陸地域平野部の花粉分析結果をみると、縄文時代にはスギ属が多産する成果が多く見られることから、平野にはスギが多く分布していたものと考えられる。しかし現在では開発が進んでこのようなスギ林はほとんど残っておらず、入善町の「杉沢の沢スギ」などが見られる程度である。スギは多雨な気候を好むことから、河道内でスギ属の花粉化石が多産したのは、気候の多雨化により周辺にスギ林が分布を拡大した可能性がある。

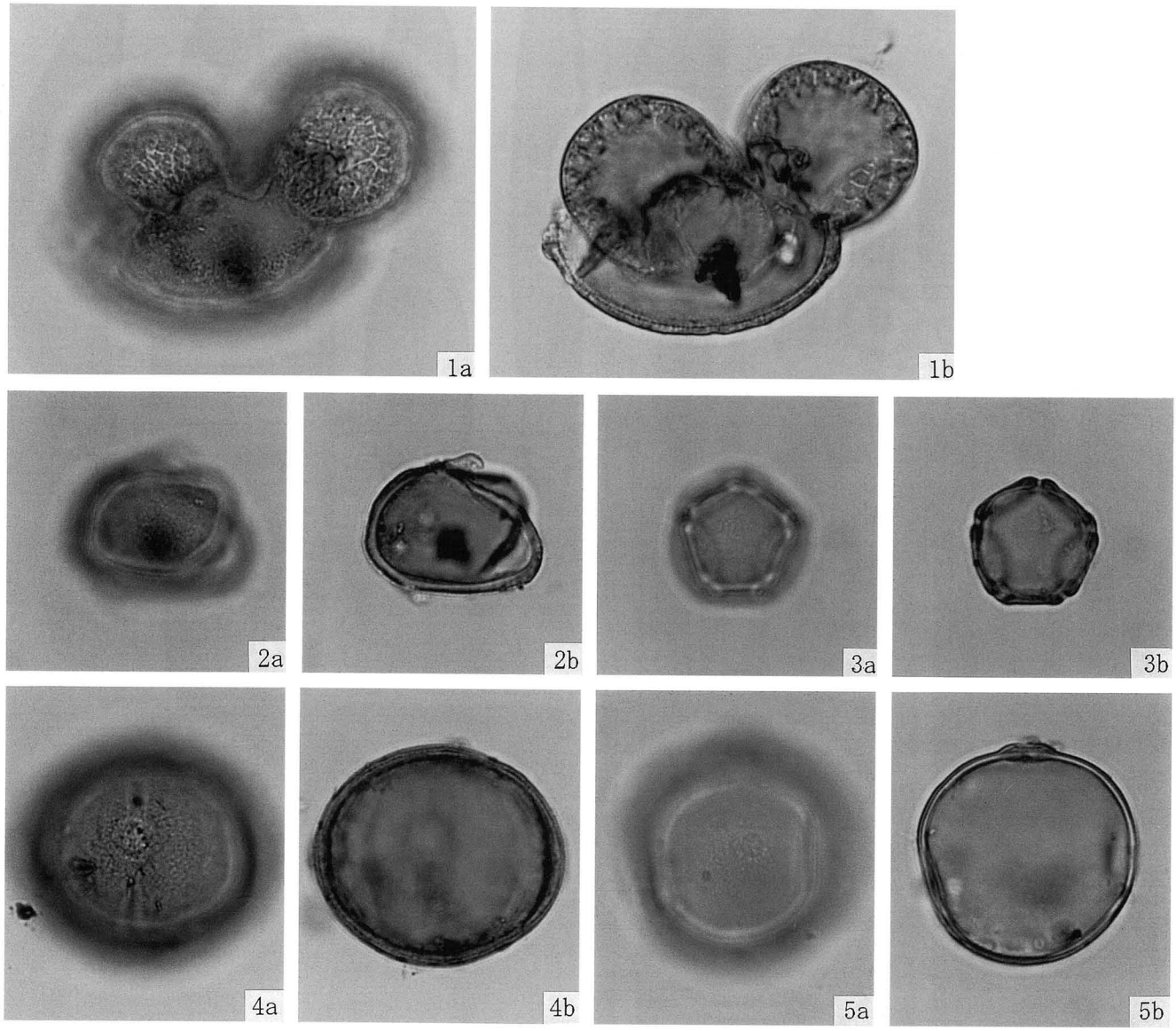
一方、遺構内の分析成果をみると、種実遺体、植物珪酸体ともに保存が悪い。畠では耕作により常に好気的な環境下におかれるため、微生物や紫外線などにより有機物の分解が早い。このため、炭化している場合は残る可能性があるが、炭化しなかった場合、種実遺体は残りにくいと考えられる。植物珪酸体の分解について、近藤（1988）は植物珪酸体の生産量と土壌中の残存量に着目し、土壌中での植物珪酸体量が生産量に比べて大幅に少ないことから、植物に再び吸収されたり粘土の形成に関与したりして、比較的早い段階で消失する可能性を指摘している。おそらく、堆積物の風化が進行するのに伴い、植物珪酸体の一部が消失したと考えられる。なお、植物珪酸体組成をみると、タケ亜科の割合が比較的高い。タケ亜科は立山山麓に広く分布する落葉広葉樹林では林床として存在するほか、自然災害や伐採などによって森林が失われると、先駆的に侵入してササ林を形成する。畠作土の母材となっている氾濫堆積物には、常願寺川水系からもたらされた多くのタケ亜科が分布していたと考えられ、検出されたタケ亜科の植物珪酸体はこれらに由来すると思われる。また、わずかではあるがイネ属の植物珪酸体が検出される。稲藁は、古くから様々な農業資材や肥料などとして使われてきた歴史がある。おそらく、検出された植物珪酸体は畠で栽培されていたものに由来するのではなく、むしろ農業資材や肥料などとして使われたものに（保温用敷藁など）由来すると思われる。（引用文献は44ページに掲載）

図版１　珪藻化石・植物珪酸体



1．*Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs)V.Heurck（ボーリング地点No.5;2.0～2.05m）
2．*Amphora affinis* Kuetzing（ボーリング地点No.5;2.0～2.05m）
3．*Cymbella turgidula* Grunow（ボーリング地点No.9;2.3～2.7m）
4．*Cymbella silesiaca* Bleisch（ボーリング地点No.9;2.3～2.7m）
5．*Cymbella sinuata* Gregory（ボーリング地点No.9;2.3～2.7m）
6．*Gomphonema sumatorense* Fricke（ボーリング地点No.9;2.3～2.7m）
7．*Gomphonema parvulum* Kuetzing（ボーリング地点No.5;2.0～2.05m）
8．*Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.)Patrick（ボーリング地点No.5;2.0～2.05m）
9．*Pinnularia viridis* (Nitz.)Ehrenberg（ボーリング地点No.5;2.0～2.05m）
10．*Rhopalodia gibberula* (Ehr.)O.Muller（ボーリング地点No.5;2.0～2.05m）
11．タケ亜科短細胞珪酸体（SD23;中層）
12．ヨシ属短細胞珪酸体（SD23;下層）
13．タケ亜科機動細胞珪酸体（SD23;下層）
14．イネ属機動細胞珪酸体（SD23;下層）
15．ヨシ属機動細胞珪酸体（SD23;下層）

図版２　花粉化石



50 μ m

1．マツ属（ボーリング地点No.5;2.0-2.05m）
2．スギ属（ボーリング地点No.5;2.0-2.05m）
3．ハンノキ属（ボーリング地点No.5;2.0-2.05m）
4．ブナ属（ボーリング地点No.5;2.0-2.05m）
5．イネ科（ボーリング地点No.5;2.0-2.05m）

2．年代測定

株式会社大成エンジニアリング
パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

水橋荒町・辻ヶ堂遺跡（富山市水橋辻ヶ堂所在）は、富山市の北東部、常願寺川右岸の河口付近に位置する。本報告では、旧河道内のボーリング調査で得られた各層位の年代観を知る目的で、放射性炭素年代測定を実施する。

（1）試料

試料は、ボーリング調査地点No. 7、No. 9から採取された試料8点である。試料の詳細は表1に示す。

（2）分析方法

※パリノ・サーヴェイ（株）分析分…サンプル1はβ線係数法、サンプル2とサンプル8は試料が微量なためＡＭＳ法にて測定した。分析は（株）地球科学研究所に依頼した。

※（株）大成エンジニアリング分析分…いずれも土壌で炭素含量が少ないことから、AMS法にて測定した。分析は（株）加速器分析研究所に依頼した。

尚、放射性炭素の半減期はLIBBYの5,570年を使用し、年代は1950年からの年数で表した。

（3）結果

結果を表1に示す。全体的に見ると、サンプル1、3、5、6は約1,900～2,000年前、サンプル2、4、7は約2,600～3,000年前、サンプル8は約4,300年前を示す。

表1　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡の年代測定結果

試料名	ボーリング調査地点	深度(m)	性状	分析法	年代値（同位体補正）	年代値（未補正）	$\delta^{13}C$	Code No.
サンプル1*	No.5	1.25-1.55	土壌	β計数法	1860±70 BP	1780±60 BP	-19.8	Beta-152603
サンプル2*	No.5	2.00-2.05	木材	AMS法	2930±40 BP	2980±40 BP	-27.9	Beta-152685
サンプル3	No.7	0.90-1.30	土壌	AMS法	1810±30 BP	1800±30 BP	-24.34±0.67	IAAA-10509
サンプル4	No.7	1.55-1.75	土壌	AMS法	3030±30 BP	3070±30 BP	-27.02±0.62	IAAA-10510
サンプル5	No.9	0.55-1.00	土壌	AMS法	2160±30 BP	2080±30 BP	-19.82±0.87	IAAA-10511
サンプル6	No.9	1.00-1.30	土壌	AMS法	1940±30 BP	1880±30 BP	-21.23±0.73	IAAA-10512
サンプル7	No.9	1.50-1.70	土壌	AMS法	2640±30 BP	2600±30 BP	-22.22±0.80	IAAA-10513
サンプル8*	No.9	2.30-2.70	土壌	AMS法	4230±40 BP	4190±40 BP	-22.8	Beta-152686

＊：パリノ・サーヴェイ株式会社分析分、他は株式会社大成エンジニアリング分析分

（4）考察

サンプル8は、河道形成以前の堆積物、サンプル2、4、7は旧河道の底付近の堆積物、サンプル1、3、5、6はそれよりも上位の河道内埋積物である。常願寺川は勾配が急で、立山カルデラの崩壊堆積物を抱えているので、土砂供給量が多く、川筋が安定しなかったとされている（藤井，1992；2000）。このことから、検出された河道は過去に作られた河口付近の脈状流の一つであると考えられる。今回の結果から、河道形成以前の堆積物が約4,000年前、河道基底付近の年代値は約3,000年前、また河道中層付近の年代値は約2,000年にあたる。したがって、奈良・平安時代の河道は少なくとも中層まで埋没していたと考え

られる。

富山湾海底には、弥生の小海退時に後背湿地に成立した森林が、埋没林として魚津や入善沖に残っている（藤井，2000)。また、「弥生の小海退」の古気候として、冷涼で多雨な気候が推定されている（那須，1989など)。本遺跡の河道形成時期もこの時期と重なっていることから、河口が現在よりも沖であった時代に多雨化により河川作用が活発化し、河道が形成されたと考えられる。その後の砂丘発達等によって後背湿地化し、低地に植生が被覆したため腐植層が発達したと推測される。

引用文献—Ⅳ自然科学分析１．２．引用分

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p.73-88.

Asai, K. & Watanabe, T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom，10，p.35-47.

原口和夫・三友　清・小林　弘（1998）埼玉の藻類　珪藻類．埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，p.527-600.

藤井昭二（1992）富山平野　「アーバンクボタ31　北陸の丘陵と平野」　p.38-47. ㈱クボタ

藤井昭二（2000）大地の記憶　富山の自然史　197p.　桂書房

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.

近藤練三（1988）植物珪酸体（Opal Phytolith）からみた土壌と年代．ペトロジスト，32，

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.

Krammer, K.（1992）PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353., BERLIN・STUTTGART.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.（1986）Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.（1988）Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.（1991a）Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.（1991b）Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lineolatae）und Gomphonema. Band 2/4 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

那須孝悌（1989）活動の舞台：概論　「弥生文化の研究１　弥生人とその環境」　永井昌文・那須孝悌・金関　恕・佐原　眞編集　p.119-129. 雄山閣.

V　まとめ

縄文・弥生時代

縄文時代の遺物は包含層や遺構から比較的多く出土した。しかし、遺構出土の遺物はほとんどが後世の紛れ込みと思われ、土師器や須恵器を伴っている。河道跡を除いて縄文時代の遺構と断定できるものはなかった。本遺跡で出土した後・晩期の土器は、顕著なローリング痕跡も無いことから、至近距離に存在した集落から河川の氾濫によって運ばれてきたものと思われる。出土した縄文土器の時期は串田新式の土器が１点出土した以外は後期から晩期に属する。これは河道跡が形成される前に堆積した地山層が約4,000年前（中期後半）との放射性炭素年代測定の結果に合致している。遺跡周辺、常願寺川両岸の扇端部を覆う黄色粘質シルトの地山層は、中期後半以降に堆積したこととなる。それ以前は海水準が現在より４～５ｍ高かったとされており、このあたりは潟湖であった可能性が考えられる。その後海水面が下がり、河川の活発な土砂運搬作用によって１,000年程度の内に潟湖は埋没したのであろう。付近の他の遺跡でのボーリング調査データが蓄積されれば中期以前の様相が明らかになってくるだろう。

弥生時代の遺構は河道跡の南側に溝跡、柱穴などを確認した。河道の自然堤防上の微高地に集落を形成していたものと思われる。時期は弥生時代後期の法仏式期を主体とし、月影式の古い階段のものを若干含む。

第２６図は、地山面のエレベーションと包含層出土遺物の破片数をＸ座標を10ｍごとに区切って積み上げ面グラフに表したものである。縄文時代の遺物と弥生時代の遺物はほぼ似たような分布を示す。河道跡の両岸に二つの大きな山がある。縄文、弥生時代を通して河道両岸の自然堤防上で磨石や石皿、石包丁形石器などを使って植物質食料の収穫、加工、調理などの作業をしていたと考えられる。

古代（飛鳥時代から平安時代）

調査区が幅1.4ｍ、長さ600ｍと狭長なため全体像をうかがい知ることが難しいが、第２６図等から、時期ごとの土地の利用状況をある程度知ることができる。

Ｄ区は各時期の遺物が少量ずつ出土している。方形竪穴状遺構（ＳＫ４３）があることから居住区であったと考えられる。Ｄ区はＣ区の北半部より若干高く、他の区が調査中、常に地下水が涌き出て排水溝やポンプが欠かせなかったのに比べて、乾燥していた。Ｄ区の辺りは古い時期の砂州であった可能性がある。

Ｃ区からは７世紀末から９世紀の土器が特に南半部分から出土している。中でも須恵器の出土割合が高いことから、７世紀末から９世紀前半が主体であろう。北半部は窪地状に低くなっており、古代の遺物の出土量も少ない。古瀬戸を出土した方形竪穴状遺構（ＳＸ０１）が存在することから、そのころから居住域となったのであろう。

Ｂ区の南半部からＡ区の北端部にかけて８、９世紀の土器が多く出土している。Ｂ区は黄色粘質シルトの地山に凹凸があることがわかるが、Ａ区北端部とＢ区南半部ではこの層

から掘りこむ下層遺構と、一層上の灰褐色土～黒色土から掘りこむ上層遺構が混在する（表２ 溝属性一覧に、上層、下層の区別がつくものについては記した）。上層の基盤層はほぼ水平である。河川の氾濫によって堆積したものか、あるいは盛土による整地の可能性も考えられる（註１）。Ｂ区南半部には「古堂」の字名が残る。

Ｂ区の北半部では下層の遺構のみが確認されている。浄化センター建設地でも検出されていた、畠跡と考えられる格子状の溝と同じ性格と考えられる。浄化センターの北半部にあたる平成８・９年度の調査区では方形掘方をもつ柱穴が10～15cmと浅く、報告書でも検出面より上の層から掘りこんでいると述べられている（市教委1999）。本調査区の北半部では下層遺構のみが検出されたが、浄化センター北半部には掘立柱建物など、上層遺構が多く存在するということであろう。よって北半部の畠跡は官衙跡よりも古い段階のものということができる。

Ａ区河道跡の南側では10世紀の土器、特に土師器食膳具が多く出土しており、それと重なって製塩土器が出土していることが注目される。また、ふいご羽口、鉄滓、鉄塊などの出土も見られる。

Ａ区の河道跡については、奈良・平安時代にはかなり埋まっており、遺構検出面から１ｍ前後と浅くなっていた（北岸付近では1.5ｍ程度の深さがあった可能性がある）。遺物の出土量は少なく生活域ではなかったようである。河道跡北岸の段切り部分の浅い溝の中から須恵器が出土しており、この段切りは古代に利用されていた施設と考えられる。段切り部分に並んだこれらの溝は形状からみて、半割された丸太を並べた足場の跡と考えられる。これらのことから奈良・平安時代においても北岸部分ではまだ水の流れがあり、それを利用していたと考えられる。浄化センターの東側にも海岸線に向かって帯状に低い箇所があり、河道跡と考えられる。この東側河道跡はいつの時代のものか定かではないが、明治４４年の地図にもこの位置に小さな川が描かれており、近世前期の旧北陸街道はこの川に沿って浜街道にむかっているようである。Ａ区の河道跡はこの川につながる可能性と、西側の今川の蛇行の一部分がかっている可能性がある。

以上のことから浄化センター建設地を中心とした官衙跡の官衙域設定についての仮説を立ててみたい。南側と東側の２つの河道跡は官衙域の設定に大きな影響を与えている。８、９世紀を中心とする官衙跡は河道跡のすぐ北側にあるＳＤ２６（Ａ区）を南の端としていると考えられる。浄化センター東側の河道跡が古代までさかのぼるとすればこれが官衙の東を限る線となる。浄化センター東側で検出されたＬ字形の区画溝はある時期の官衙域の外郭線と考えられる。この官衙域が方一町の区画を持っていたと想定すると、東側の外郭線は東側河道跡とほぼ接する。

北側は古段階の耕作地をはさんでＣ区に１つのブロックがあり、Ｃ区北半の窪地の手前でこのブロックが終わる。このブロックはＡ・Ｂ区より古い時期（７世紀末）から存在する。西側に向かっては官衙域がさらに広がっていることが確認されたが、常願寺川の改修によって破壊されている。

第25図　西水橋町字名図

（原本明治35年「富山懸中新川郡西水橋町全圖」石金家所蔵）

河道跡の南側は、１０世紀に製塩にかかわる作業や、鍛冶などが行われていた小規模な生産の場であったと考えられる（註２）。本遺跡を水橋駅家とすると１０世紀には律令的な駅伝制はかなり衰退しつつも、いまだ機能しており、駅家•駅馬の維持財源のための生産が行なわれていたことも考えられる。あるいは有力者の私的な生産であったのだろうか。官衙の中心であったと考えられる浄化センター部分では１０世紀の遺物は８・９世紀の遺物の量に比して少なく、駅家が存続していたとしても場所を移していたのであろう。

以上、推論に終始してきたが、本遺跡はその名の通り水と深く関わっており、周囲に存在する常願寺川本流、支流の中小河川や他の河川、日本海を通じて他の地域とつながっている。中村太一氏は「河口部は、陸上交通・海洋交通・河川交通の結節点になりうるため、前近代社会においては、港設定の地として好適な条件を有していた。」と述べられている（中村 1997）。本遺跡はまさにその条件を備えており、陸路における渡し場的性格とともに、水運の要衝として性格が強いと言える。

註

註１　兵庫県龍野市の子犬丸遺跡は布勢駅家とされているが、初期の掘立柱建物の駅家が廃絶した後に整地を行い、礎石瓦葺建物の駅館院が成立している。

註２　岸本雅敏氏から、製塩土器の支脚と断定できる破片がなかったため煎熬は海岸付近で行なって、この場所まで容器ごと運びなんらかの作業を行っていたのではないかとのご指摘をうけた。

参考文献

上田尚美 1998 「富山県内の石包丁について―下老子笹川遺跡出土の新資料から―」『紀要　富山考古学研究』創刊号　（財）富山県文化振興財団・埋蔵文化財調査事務所

上市町教育委員会 1982 『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町土器•石器編』

岸本雅敏 1983 「富山県における土器製塩」の成立と展開」『北陸の考古学』石川考古学研究会

木下良、広瀬誠他 1980 『富山県歴史の道調査報告書 - 北陸街道 - 』富山県教育委員会

小林高範 1997 「水橋荒町遺跡の調査に携わって」『水橋の歴史』第４集

小林高範 2000 「富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡について」『第1回奈良時代の富山を探るフォーラム』資料　富山市教育委員会

龍野市教育委員会 1992 『布勢駅家Ⅰ―子犬丸遺跡1990、1991年度発掘調査概報―』

富山市教育委員会 1997 『富山市水橋荒町遺跡』

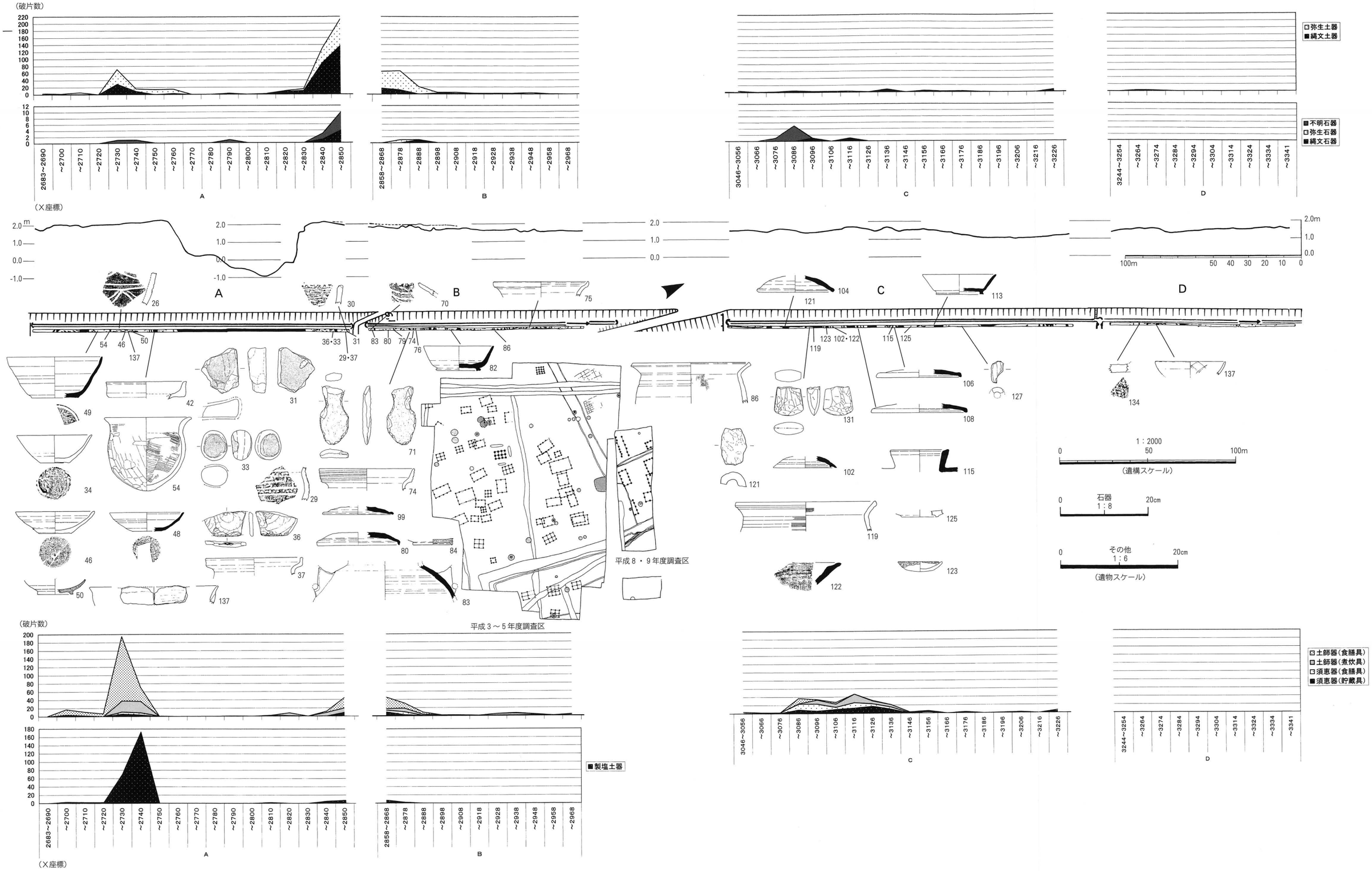
富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 1998 『富山市水橋荒町遺跡発掘調査概要』

富山市教育委員会 1999 『富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査概要Ⅱ』

中村太一 1997 「港津の構造―じょうべのま遺跡に関する一試論」『古代交通研究』第６号

藤井昭二 2000 『大地の記憶』桂書房

水橋郷土歴史会 1989•1995 『水橋の歴史』第１集・第３集



第26図　地山面エレベーション図及び遺物出土頻度積上げ面グラフ

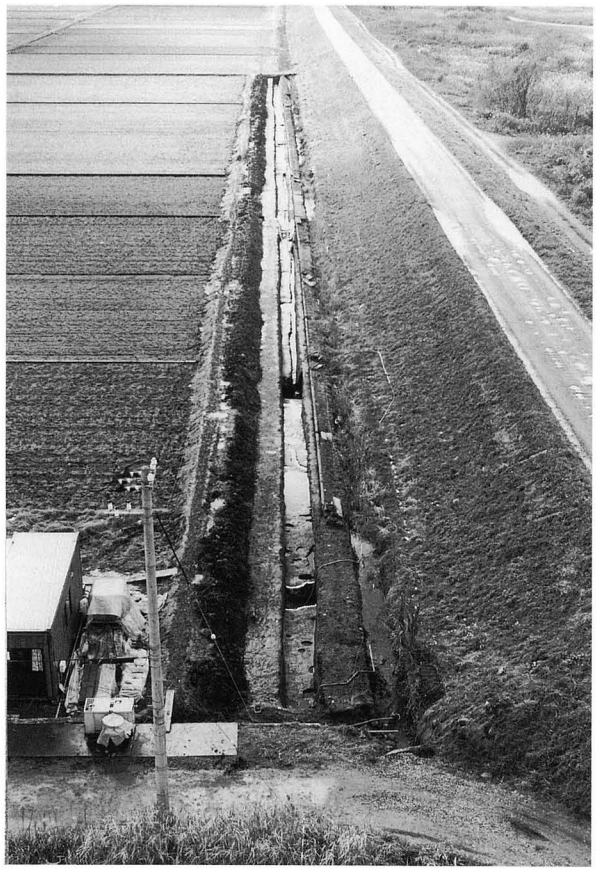
第27図　推定官衙域とその周辺（S＝1/2,000）　遺物集中出土区

写真図版1（水橋荒町・辻ヶ堂遺跡遠景）

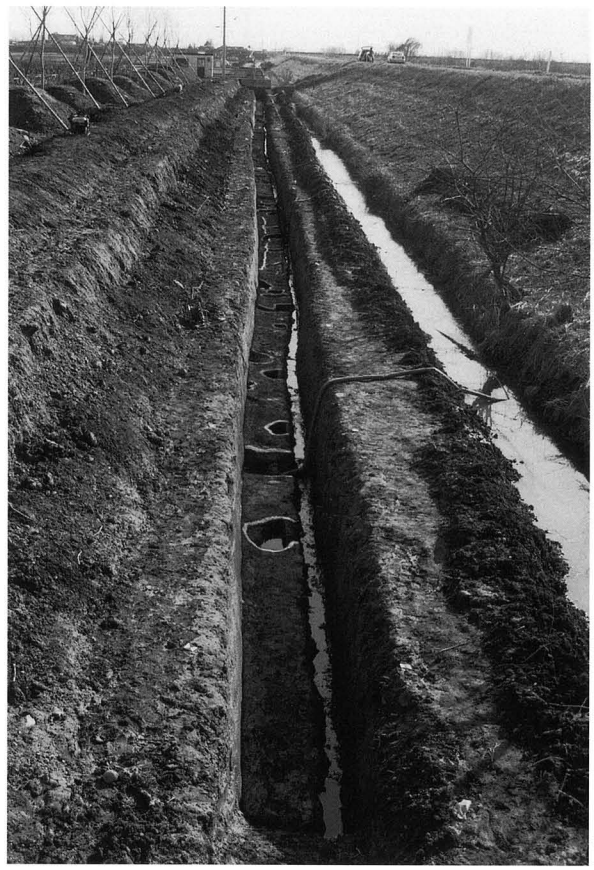
水橋荒町・辻ヶ堂遠景（南から）

水橋荒町・辻ヶ堂遠景（西から）

写真図版2（各調査区全景）



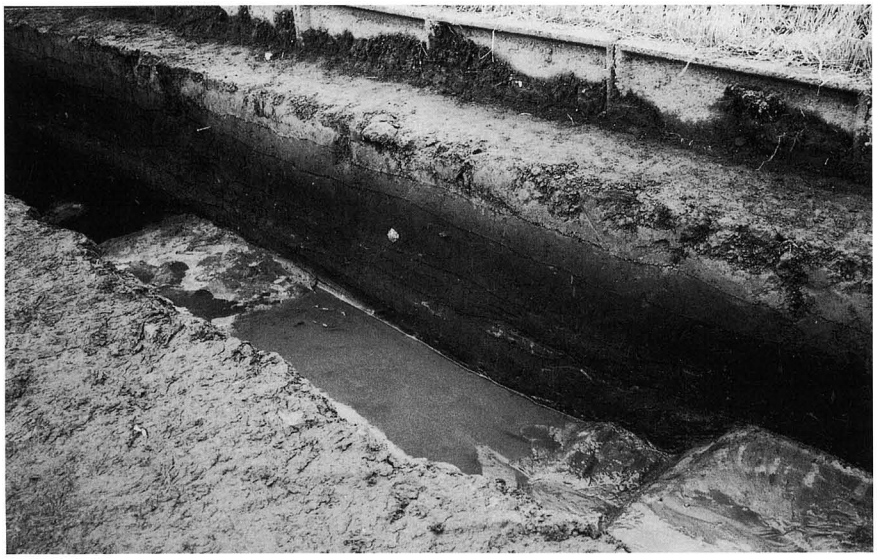
A区（北から）



B区（北から）

C区（北から）

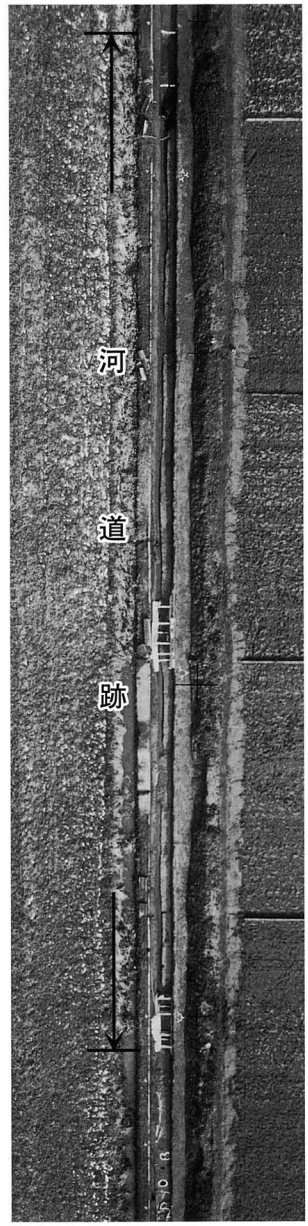
D区（北から）



河道跡北側肩段切り部土層断面（東から）

河道跡段切り内溝（東から）

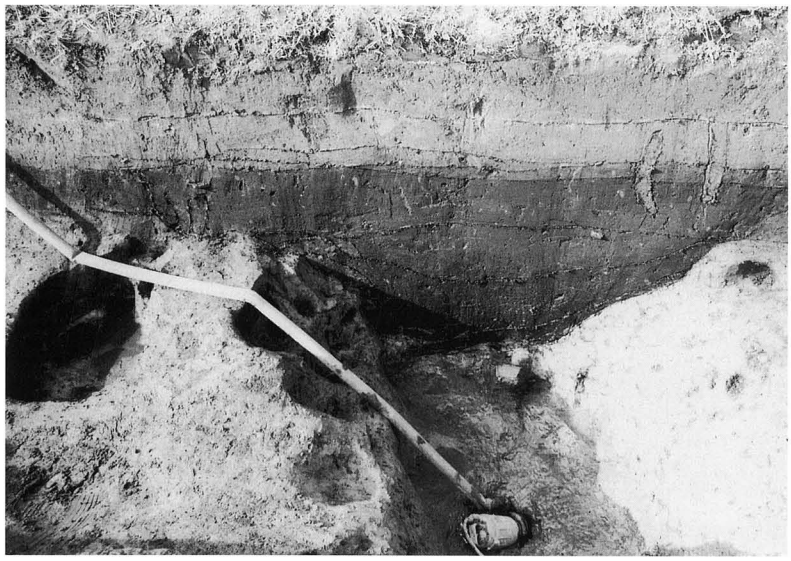
河道跡南側肩部土層断面（東から）



河道跡全景（上が北）

河道跡ハンドオーガボーリング調査作業風景

写真図版4（A区）

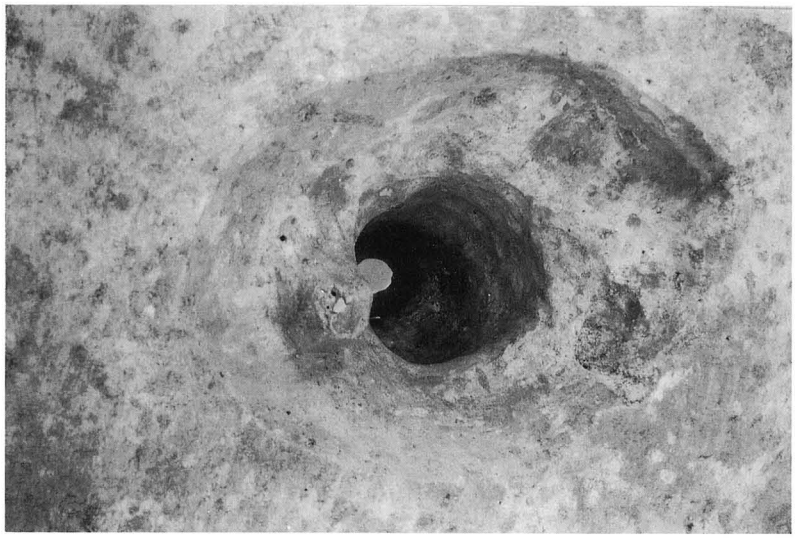


ＳＤ26土層断面（東から）

ＳＤ07検出状況

ＳＤ11弥生土器高坏出土状況

ＳＤ11・ＳＢ01付近（上が北）



ＳＫ01（ＳＢ01）

ＳＤ74土層断面（西から）

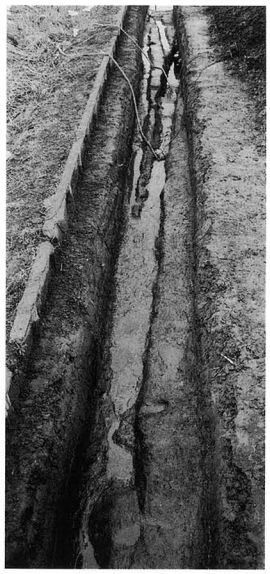
ＳＤ85遺物出土状況（西から）

ＳＢ02（東から）

ＳＥ01（南から）

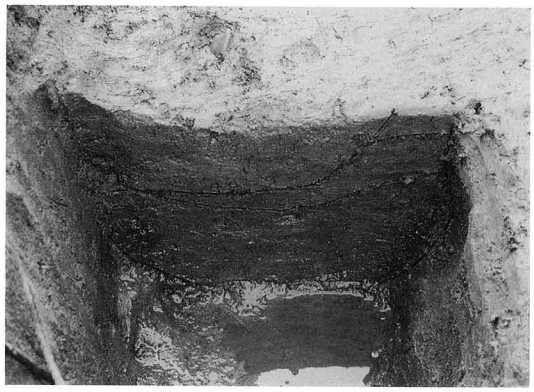
Ｐ72（南から）

写真図版6（C区）

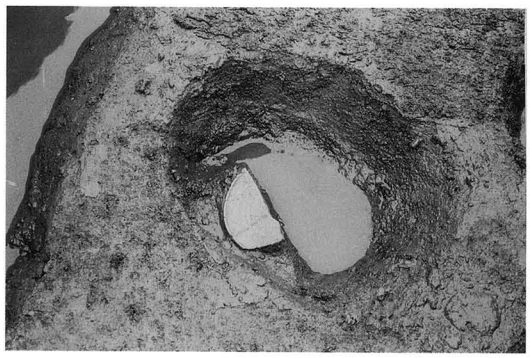


SD45・SD32（南から）

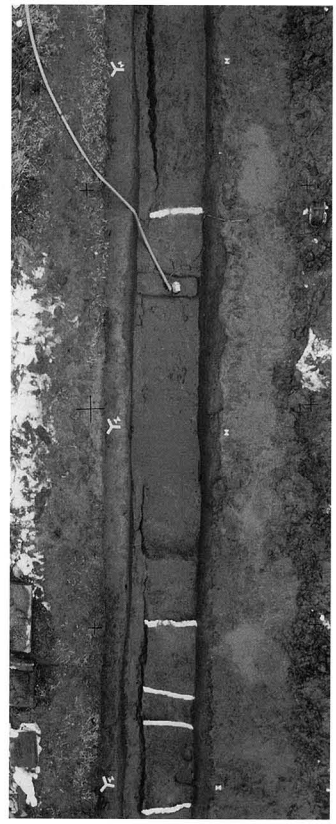
作業風景



ＳＢ32・ＳＤ45土層断面（北から）



Ｐ61遺物出土状況



SK22・SD55・SD56（上が北）

ＳＤ31土層断面（東から）

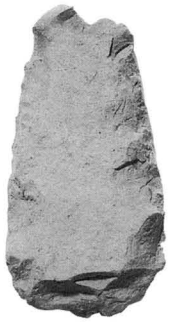
ＳＤ30・ＳＤ43・ＳＤ53土層断面（東から）

ＳＤ66土層断面（東から）

ＳＤ57土層断面（東から）

13

ＳＤ11弥生土器高坏（スケール約４分の１）



3

4

34

31

35

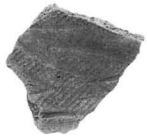
11

12

36

25

26

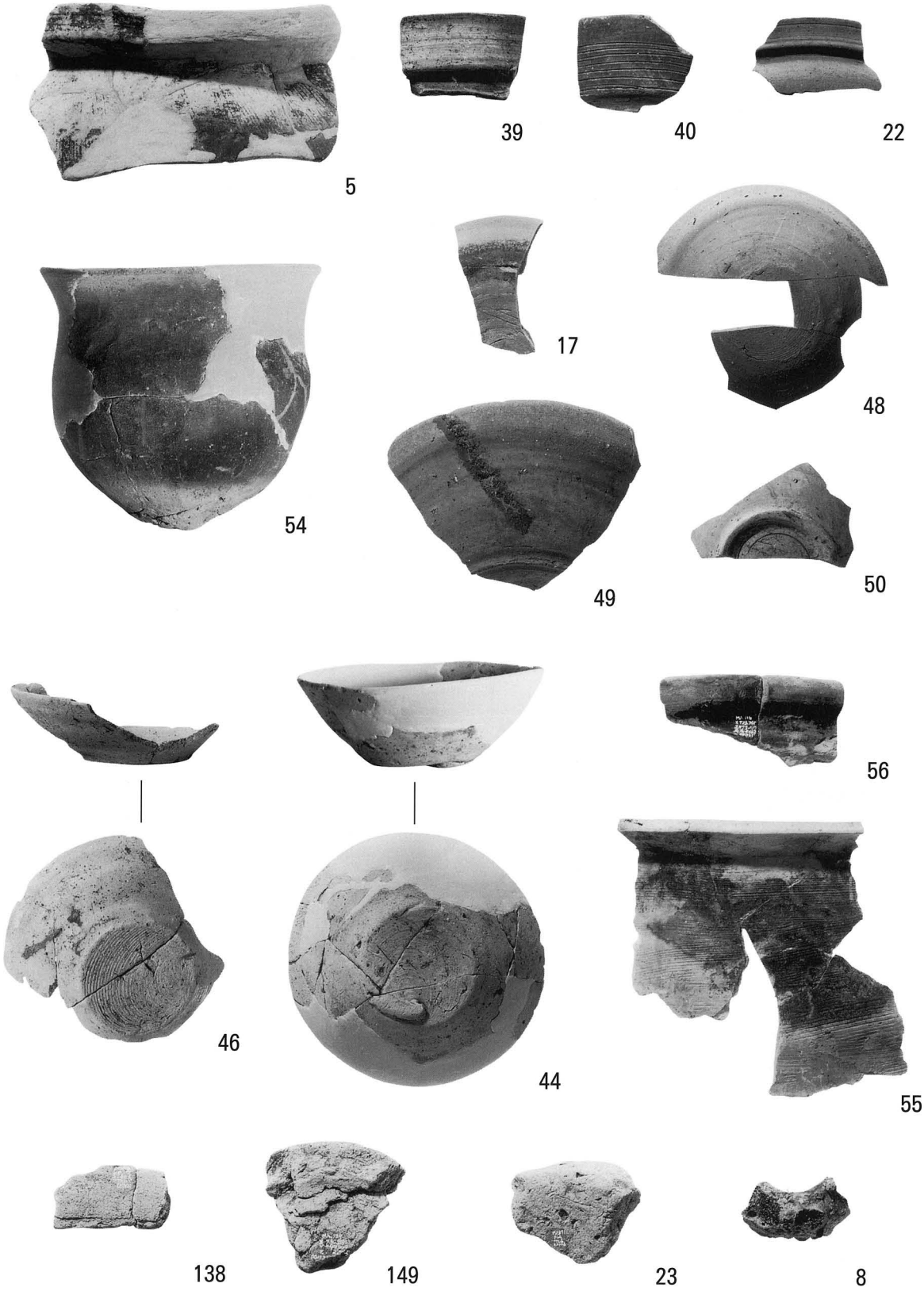


28

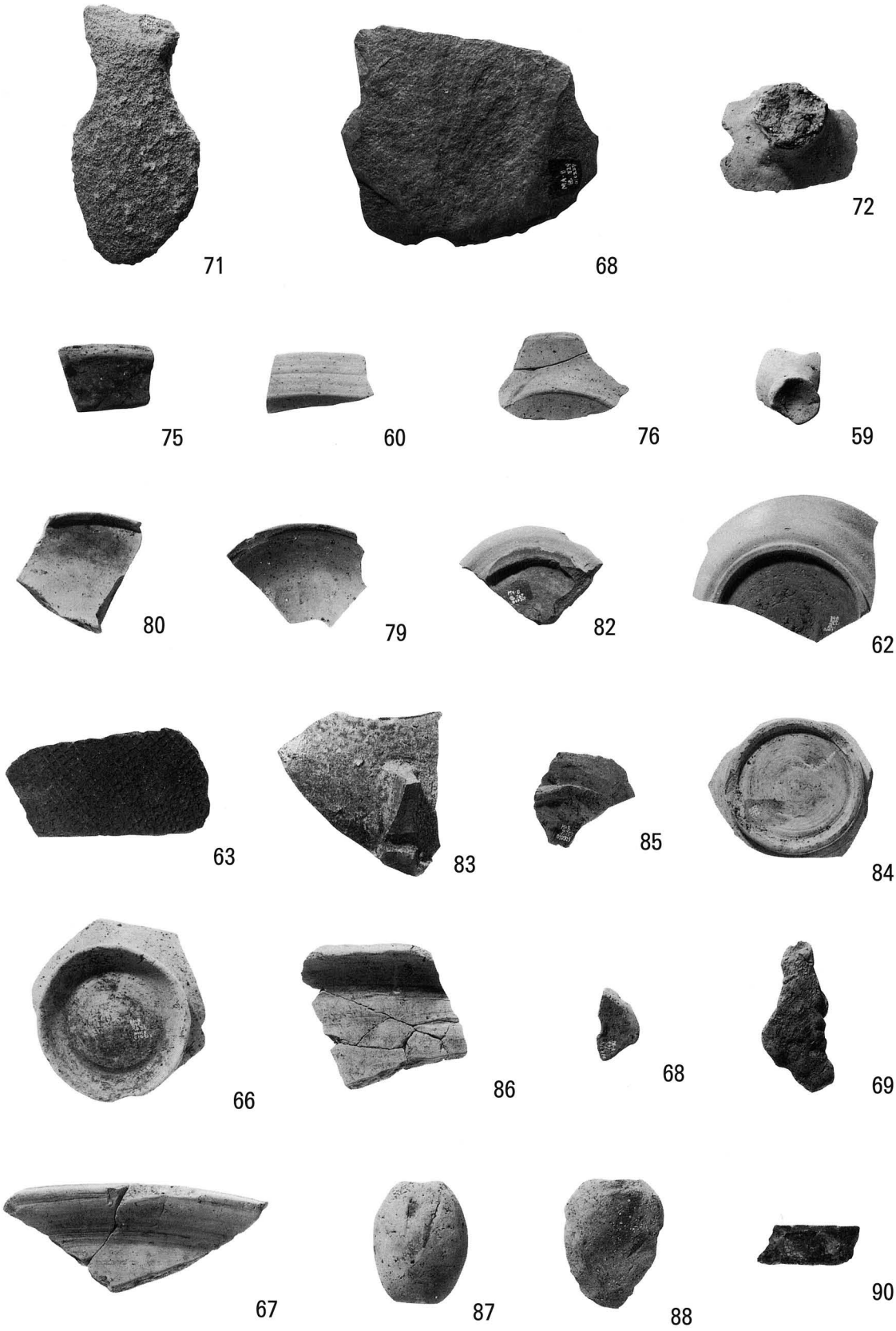
29

2

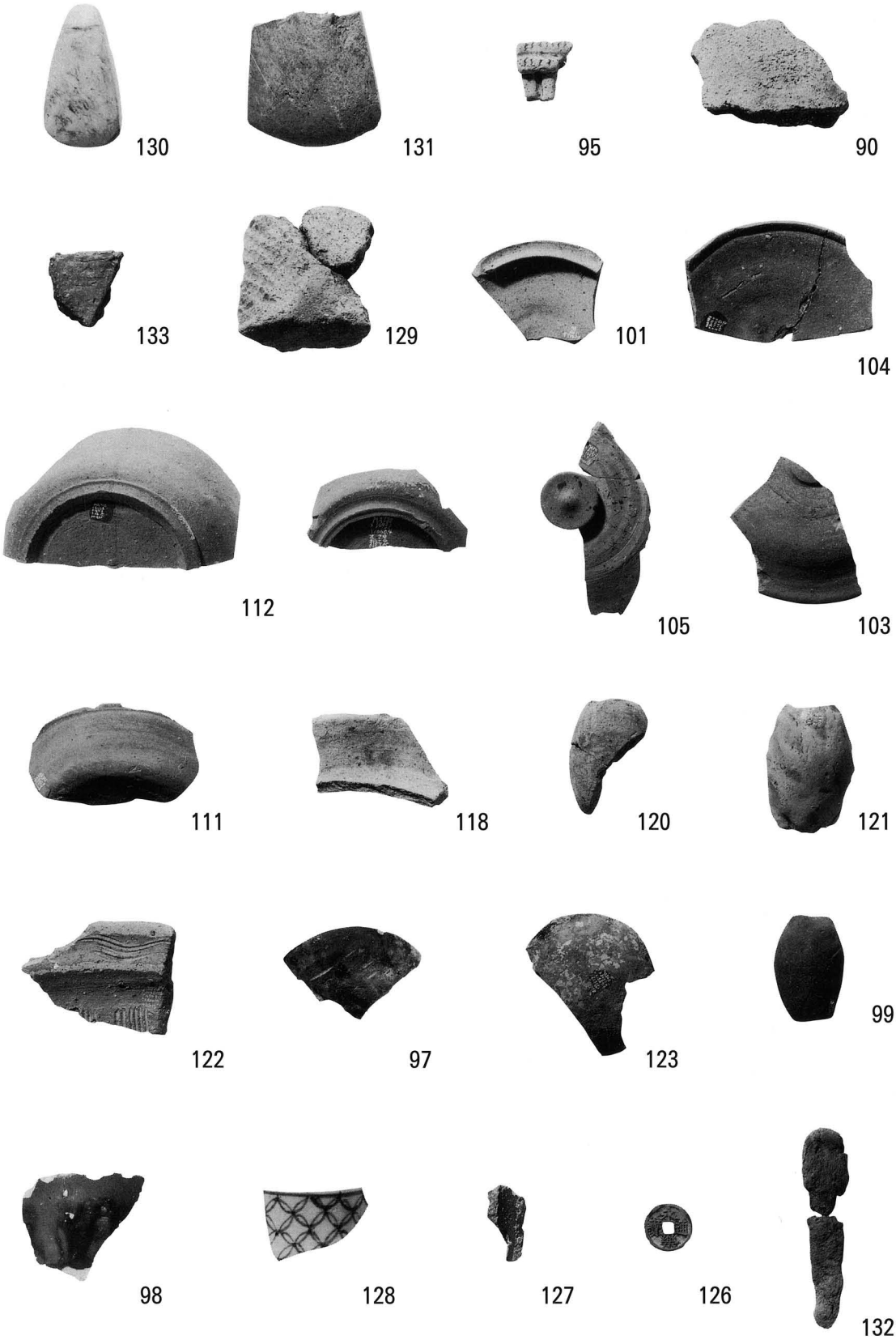
Ａ区出土縄文時代・弥生時代の石器・縄文土器



A区出土遺物



B区出土遺物（90はスケール約2分の1）


130
131
95
90
133
129
101
104
112
105
103
111
118
120
121
122
97
123
99
98
128
127
126
132

C・D区出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	とやましみずはしあらまち・つじがどういせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告書
副書名	常願寺川右岸本線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１１５
編著者名	安達志津　古川知明
編集機関	富山市教育委員会　富山市埋蔵文化財センター
所在地	〒930-0803　富山県富山市下新本町５－12　TEL　076－442－4246
発行年月日	西暦　２００２年３月２９日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
水橋荒町・辻ヶ堂遺跡	富山市水橋辻ヶ堂	16201	044	36度44分43秒	137度17分33秒	20001101～20010323	840	常願寺川右岸本線拡幅工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水橋荒町・辻ヶ堂遺跡	集落跡、官衙跡	縄文	河道跡	縄文土器、磨製石斧、打製石斧、石皿、凹石、石棒、磨石	縄文時代後期から平安時代まで続く幅72mの河道跡を確認した。
		弥生	溝、柱穴	弥生土器、石包丁形石器、削器	
		古墳		古式土師器	
		飛鳥、奈良、平安	溝、竪穴状遺構、井戸、土坑、掘立柱建物	須恵器、土師器、灰釉陶器、製塩土器、土錘	平成3～5・8・9年の調査で発見された官衙跡の西側への広がりを確認した。
		中世	溝、竪穴状遺構	中世土師質土器、珠洲、古瀬戸、土錘、銅銭	
		近世		越中瀬戸、近世陶磁器、土錘	
		不明	溝、ピット	木製品、ふいご羽口、鉄製品、砥石	

富山市埋蔵文化財調査報告115

富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告書

－常願寺川右岸本線拡幅工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告－

2002(平成14)年3月29日発行

発　行　富山市教育委員会
編　集　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒930－0803
富山市下新本町5番12号
TEL 076－442－4246
FAX 076－442－5810
E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.toyama.jp
印　刷　㈱富山フォーム印刷